

## 南砺市旧福光町松村家所蔵の『大日本本草』草稿』について

吉野 俊哉

### はじめに

江戸中期以降の近世本草学は、医薬や食など実生活の物質的な豊かさに加え、知的な好奇心を満たす趣味や教養といった精神性の涵養へと広がり、隆盛した。その一因には蘭学の普及とともに、人をとりまく世界の観察とその記載の元になった、実証的な西洋博物誌の影響があった。それを承けて本草家たちは野外での採薬を重視し各地の採薬記を作成するようになる。加えてその頃に来日したシーボルトら西洋の医師や博物学者からの影響も受け、幕末頃には採薬の成果を腊葉の制作によって残す例が増えていった<sup>(1)</sup>。

西洋博物誌の影響を受けたとは言え、幕末から明治初期の近代博物学（植物学）は近世本草学が直接進化したものではなかった。両者で対象とする分野は重なるが、あくまで実学として経験知を蓄積していった近世本草学の展開は、分析と分類の体系化を研究手法として確立した西洋の博物学とは似て非なるものだったからである。

その一方で、明治期の西洋文化摂取による学問的パラダイムの転換期にあっても本草学が営々と蓄積してきた実学的価値を継承し、漢方医学の復権を唱えて尽力した活動は各地に見られた<sup>(2)</sup>。中でも京都の本草家山本章夫（文政10年〈1827〉～明治36年〈1903〉）はそれらに賛同するだけでなく、明治以降にも京都において物産会を開き、本草学を講じた家塾山本読書室を明治36年まで維持したことは近世以降の日本医薬学、博物学の歴史を通覧した時に特筆されるべきことであろう。

筆者は、近世本草学の地域的な展開を研究する中で、山本章夫の立山での採薬やその際に制作した腊葉標本の価値、それを含む幕末から明治初期に見える近世本草学から西洋博物学への過渡期の事例を調査するとともに同様の事例の情報収集を進めてきた。

過日、富山県南砺市立福光美術館が開催した、福光出身の日本画家石崎光瑤（明治17年〈1884〉～昭和22年〈1947〉以下、光瑤）の画業を紹介した企画展<sup>(3)</sup>で、登山家でもあった光瑤が明治末に立山や白馬岳山域で採集した高山植物を含む腊葉標本帳「谷村友吉『高山植物標本草木類』<sup>(4)</sup>（以下、『腊葉帖』）」の出展情報を得た。これを制作した谷村友吉の名前を聞いたのはこの時が初めてだったが、写真で見た『腊葉帖』は、それまでに管見していた近世の本草家が制作した腊葉帖と類似する大変興味深いものであった。明治以降の本草学の影響に関連する資料として、その熟覧を希望しつつも果たせずにいたが、昨年（令和4年）5月に改めて福光美術館のご厚意で、『腊葉帖』を所蔵される松村壽氏（南砺市旧福光町）をご紹介いただき、同家所蔵の山岳関係図書（以下、山書）や和漢籍と併せてこれを閲覧する機会を得た。

同家は地元福光でも有数の旧家で、江戸後期から現代まで膨大な和漢籍と山岳・登山史関連資料を架蔵して来られたが、それらは一見して同家の教養を支えてきた質の高さが窺われるものであった。

その中で明治期の植物図譜や『腊葉帖』と並んで筆者が特に目を引いたのは、『大日本本草』と書かれた木箱に平積みされた、膨大な未整理の草稿であった。これも『腊葉帖』を制作した谷村友吉（嘉永元年〈1848〉<sup>(5)</sup>～大正12年〈1923〉、号は西涯。以下、谷村西涯または西涯）が明治以降に書き残したものであった。その場で松村氏から収蔵の経緯や西涯について伺い、草稿の一部を拝見し写真を撮影させていただいた。

『大日本本草』という書名はその時に初めて耳にしたものであったが、それは近世本草学の端緒を開いた大著『大和本草』（貝原益軒、宝永6年〈1709〉）や、それを凌駕する意気込みで編纂された<sup>(6)</sup>という『広倭本草』（直海元周、宝暦9年〈1759〉）をも連想させる。同書は、更にそれを超えて「大日本帝国の本草」を集大成しようとしたかのような壮大な意味さえ感じさせた。そして前出の『腊葉帖』の制作だけではなく、

松村家で竹籠に入ったまま大量に残されている西涯の未整理腊葉も一緒に拝見して、これらを残した谷村西涯は本草学や植物に深い興味や知識、そして相当の熱意を持つ人物だったことが想像された。

『大日本本草』の内容への興味に加えて、本草学が歴史の中に消える明治になってから著され、しかも敢えて「植物学」ではなく大日本「本草」とした意図、そしてこれを独力で編纂した谷村西涯とはどのような人物だったのか、大変に興味を持たれた。

そこで、日を措かず再度松村家を訪れ、『腊葉帖』と「大日本本草の草稿」（以下、『大日本本草』または「本資料」）を当館で借用し、熟覧の上整理と内容の調査の希望を申し出、ご了解をいただいた。

調査では、まず「本資料」の全体量を確認しそこに収載された品目や書かれている項目のリスト化を行い、特に具体的に本草学的な記述を特徴付ける内容を抄出してまとめていった。そして関連する情報を集めながら調査をすすめる中からは、内容の資料価値だけではなく、明治40年前後に見える近代登山、博物学黎明期の時代性と西涯の教養、登山や植物採集とも関係が深い人脈、そしてそれらの背後にあった福光の地域性などが相互につながっていることが見えた。それらの様々な事実の関連も併せて調査することで、『大日本本草』の持つ重層的な資料価値が明らかになるものと思われた。そしてこれが、近代以降の地方在住の教養人に見られた本草学の影響として、これまで知られてこなかった大変に興味深い事例であることも分かってきた。

詳細は後述するが、調査の結果「本資料」には、西涯が編纂しようとした『大日本本草』の草稿だけではなく、それ以前の段階で編纂を思い立ちつつ、恐らく未完のままであったと思われる複数の植物関連著書の存在や、本人の幅広い文化的な教養、人物像を知る上で重要な自筆の資料も混在していることが分かった。

今回の調査ではそれらの内容を併せて確認し、『大日本本草』の実態と編纂の意図を考察した。資料からは谷村家をめぐると地域的な人間関係も垣間見えたが、本文では必要な場合最小限に触れることとし、小論では「本資料」の詳細を明らかにすることを目的とする。

次章以下は、「本資料」の概略を紹介し編纂の意図や動機、及びその背景となった諸情報に考察を加えた、現時点での調査報告である。

## 1. 「本資料」の概要

### 1-1 松村家が収蔵する経緯

「本資料」は、現在松村壽氏が所蔵するものである。松村家は江戸時代後半18世紀から続く福光の旧家で、その好書好学の家系の中で3代謙（文化8年〈1811〉～嘉永2年〈1840〉）、4代清治（天保12年〈1841〉～明治44年〈1911〉）、5代和一郎（元治元年〈1864〉～明治45年〈1912〉）を中心に代々蔵書を蓄え<sup>(7)</sup>、近代以降も当主が充実させてきた。特に近代になってからは山書の蔵書も多く、同家では一連の蔵書を懸壺堂文庫として目録を作成しておられる。お訪ねして最初にそれを拝見したところ、大まかな蔵書構成は山書と伝来の和漢籍、本草書、近代の植物学関連の書籍とにほぼ二分するようであった。

当然『腊葉帖』や「本資料」は後者に含まれるが、これは代々松村家が架蔵してきたものではない。

谷村家と松村家は共に福光の旧家で、西涯と松村清治はともに幼少より福光の儒学者宮永菽園の同門で親交があったこと、両家間に複数の姻戚関係があったこと、また、西涯が家業の麻問屋を仕舞った後、明治36年（1903）に福光本町に買った家が松村家の近隣であったことなどから大変に親密な関係であった<sup>(8)</sup>。谷村家では昭和53年（1978）8月に、福光本町にあった家を処分した。その際、そこに遺されていた西涯の珍しい蔵書の内、松村氏が、西涯とも関係の深かった清治や和一郎の蔵書を現在も大切に保管していることや、それまでの松村家と西涯の様々な縁に思いを致し、自然科学に関する蔵書の一部を松村氏に譲った際に移管されたものである<sup>(9)</sup>。

## 1-2 内容と分量、保存状態

現在もほぼ移管時のまま一括して木箱に入れて保管されている。箱の中は二段に仕切られており、上下それぞれの段に紙紐で縛って束にした資料が左右ほぼ均等に、計4つの山に分けて平置きで収められている(写真1)。調査の際、便宜的に上段左を第1、右を第2、下段左を第3、右を第4の山とし、束は山ごとに上から順に番号をつけて仕分けた。

### 1-2-1 内容

この中には『大日本本草』の本文草稿(厚紙製の表紙を含む)だけではなく、それ以外の内容を含む資料も混在していた。その分量の把握と、内容を分析するため便宜上全体を以下のA群、B-1群、B-2群の三つの資料群に分けた。

#### ●A群：『大日本本草』本編の草稿類

大部分が本文草稿だが、その他に厚紙で作られた表紙も含まれる。その一部は散逸した状態で分散していたが、表紙に書かれた情報は『大日本本草』の総量や編纂の過程などの考察に役に立つもので、これを巻数順に並べられればある程度の全容が把握できるものと考えられた。

表紙には巻数の他に、その巻に収載した植物を分類した科や属名も記載されるが、巻数の表記では「巻之\_\_」のように数字が空白のままのものが多く見られた。これは編集の途中では巻の順序を決めず、ある程度記載する分量がまとまった段階で記入するつもりだったとも考えられるが、この点の分析は後述する。

また残存しているのは必ずしも『大日本本草』の表紙だけではなく、中にはタイトルを修正して何度も上張りしているものや、裏表が別の表紙になっているものも見られ、途中で方針を修正し試行しながら編纂していったような、複雑な経過があったように見えた。そして保存されている草稿の多くは表紙を上にして縛ってあったが、表紙の記載とその下に重ねられた内容が必ずしも一致していない場合も多い。束ねる際に内容を確認しながらきちんと整理した物ではなかったようである。

#### ●B群：A群以外の雑件・メモ類(A群以外で、西涯直筆のもの他、冊子などの印刷物)

ある程度のまとまりはあるが、全体の中に分散し、内容は雑多であった。分析に当たっては、これらを更に下記の2つの資料群に分けた。

- ・B-1群：『大日本本草』編纂の経緯や内容の解明に関する内容を含むもの。これらは、紙数ではなく件数で番号を付け、後述する「3-1 B-1群資料について」の項でリストを挙げた。今回の調査で内容を分析し、編纂の経緯や内容の推定するための重要な資料となったものである。
- ・B-2群：『大日本本草』編纂とは直接の関係はなく、個人的な西涯の趣味や教養形成にも関係すると思われる資料が含まれる。別資料として件数で番号を付けた別目録を作成し、一部は適宜『大日本本草』の分析の際に用いたものである。

### 1-2-2 分量

前述の三群ごとの分量は以下の通りである。

A群資料 本文3,740枚(内、挿絵として添付された絵図<sup>※1</sup>は彩色画941件 墨線画60件)、厚紙表紙53枚、計3,793枚。

※1 品目の名称の記載がない絵図は除いた。一枚の用紙に複数の絵図が描かれている場合も多いので、件数は枚数とは一致しない。

B群資料 108件<sup>※2</sup>(B-1群20件、B-2群88件)

※2 B群に分類した資料は刊本、写本や冊子、複数枚を虫ピンで仮留めした文書などが混在しており、紙数ではなく内容のまとまりで件数を数えた。

### 1-2-3 保存状態

資料の保存形態は一樣ではなく、一部にかなりひどい虫損が見られた。そのような書類はB-1群の資料には多く、書類によって保存状態に差が見られた。全体の9割を占める『大日本本草』本編部分でも虫損の程度には差があり、紙の折れや周縁部の日焼けなどの劣化も一樣ではなかった。このことから、西涯が生前に『大日本本草』として残した草稿は比較的長期にわたって書き継がれ、その間は異なった保存環境に置かれていたものと見られる。現状の束にまとめられたのは西涯の晩年または没後で、その際に大まかに内容を確認したとは思われるが、当初に編纂した際の順序を精査して束ねて揃えたものではなかったと推定される。

### 1-2-4 用箋

「本資料」で西涯が執筆に用いた用箋は、反古紙の裏を使うなどごく一部の例外を除き次の①～④の種類が確認できた。そして、用箋の種類とそれに書かれた内容には一つの特徴が見られた。例えば、同じ植物の記述で種類が違う複数の用箋が使われているケースが少なからず見られ、しかもその場合は同じ植物であっても書かれている用箋ごとに、内容表現が多少違う点である。このことは、『大日本本草』の記述には複数の別原稿が存在していることを示唆するが、詳細は同様の事例を比較し、後述する。

殆どが下記のいずれかの用箋に毛筆（一部はペン）で書かれていた。

- ① 木版で青色の枠を摺った罫箋 大判（縦 27.2cm×横 39.4cm）、小判（縦 24.0cm×横 36.0cm）
- ② 木版で赤色の枠を摺った罫箋（縦 24.0cm×横 36.0cm）
- ③ 無地の薄い和紙（縦 27.2cm×横 39.4cm）

このような体裁の木版摺り罫箋は、趣味人や文士などが個人用箋として名前を入れて特注したものに多く見られる。但し①～③には個人名や書齋名などは入っておらず、西涯が趣味の日常執筆活動に広く用いるために取り寄せた市販品だったのかもしれない。①には大小の二種が、また②にはやや摺りの色味に濃淡があり、作られた時期が違うように見えるものが存在している。

①の大小二種類の使い分け、①と②の使い分けと内容の書き分けには明確な理由が見えなかった。書かれた年代の違いとも考えられるが詳細は不明である。

添付されている絵図は、ほとんどすべて③に描かれている。描き方は一枚を二つ折りにして片面ずつ説明と絵図を分けているもの、一枚全面に1種又は複数の絵図を描いているものなど様々に見られた。

- ④ 大日本本草執筆用に特注した専用箋（縦 27.0cm×横 39.2cm）

やや厚手の和紙に活版で刷られたもので、用箋中央の柱部分には「對嶽園所蔵」と入っている（写真2）が、この「對嶽園」は西涯の書齋名と見られる<sup>(10)</sup>。この用箋の特徴は詳細な調査項目名が予め印刷されていることで、資料カードを作るように必要事項を埋めて記述していく形になっている。刷られた項目名から見て、この用箋は植物のみを対象としたものと分かる。

葉や花の構造を記入する項目は以下のように非常に細分化されている。

- 葉 葉柄／葉脈／葉質（面／背）／全形／大サ／辺縁／先端／基脚 変形 生存
- 花 配列／花托／苞／萼片／花冠
- 雄蕊／花糸／葯 雌蕊／柱頭／花柱／子房／胚珠
- 開花ノ時期／花ノ留存

植物の部分的な形状に対する西涯の知識と関心の高さが窺える。但し、実際に使われたものを見てもこれだけの詳細な項目をすべて埋めている例は見られなかった。また草稿全体の中で、この用箋の使用枚数は現存数を見る限り数十枚程度と非常に少なかった。

### 1-2-5 厚紙製の表紙

書名や巻数などを記入した表紙は53枚が確認できた。もともと表紙は各巻ごとに1枚作られたものと思

われるが、歯抜け状態で部分的にしか残っていないため、全部で何巻まで作られたのかは不明である。大きさには若干の差は見られるが、概ね縦 27.8cm×横 19.8cmである。この大きさは前述①の小判野箋以外であれば、折って袋綴にして製本すると都合の良い大きさである。このような大きさの違う野線の混在からは、大判野箋のものが『大日本本草』の原稿として書かれたもので、小判野箋や②の野箋に書かれたものは、元々『大日本本草』の原稿として書かれたものではなく、これとは別に書かれた原稿だった可能性があるように思われた。

表紙は、紐で縛った際に草稿の束の上に置かれているものが多かったが、表紙とその下に束ねられた草稿の内容とは必ずしも一致しないものも混在していた。

表紙には、『大日本本草』と題名が書かれた物（36枚）の他に『日本本草』と書かれた物（12枚）も見られた（表1参照）。また、その他には調査の際に「それ以外を記した物」と分類したものが5枚あった。これは実質的には『大日本本草』と関連するので前者に含めた。

ここで疑問となるのは、『大日本本草』の他に『日本本草』という題名の存在である。

B-1群資料を分析すると、西涯は『大日本本草』を編纂する前段階で、異なる題名で複数の類似した植物解説書（以下、「類編書」）を作成していた形跡が見られた。『日本本草』という題名はその中には見当たらないものだが、『日本本草』もそのような類編書と同様に位置付けられるのではないかと推定される。この点を含めて『大日本本草』と『日本本草』、及び複数の「類編書」との関係については後述する。

次に、53枚の表紙を更に細かく分類すると、『大日本本草』は「木類編」「草類編」「それ以外（海藻類、菌類）」の三つに、『日本本草』は「木類編」「草類編」「蘚苔類」の三つに細分化できる。「それ以外を記した物」とした内、「大正二年八月起草 虫類 有翅六脚 甲虫類 海産産貝類」、「大正二年八月起稿／鳥類編」、「魚類編 淡水産類／海魚類」とあるものは『大日本本草』に収載するそれぞれの品類の記述を指すと思われるので『大日本本草』に含められる。また「禾本科／莎草科 図」（同名のものが2枚）は直接本文に加わるものではなく、編集の参考か、絵図を別巻にした冊子の表紙であったと推定される。

表紙の内訳は以下ようになるが（詳細は表1を参照）、これを巻数順に並べて詳細に見ると、そこには編集の過程を推定するための諸情報が含まれていることが分かる。

○「大日本本草 木類編」 16枚

「巻之壹」、「第一続編」、「巻之貳」、「巻之三 禾本科竹類」、「編卷三」、「巻之四」、「第四巻 木類ノ部」、「巻五」、「巻六」、「巻之七」、「巻之七 単子葉之部」、「巻之八」、「巻之九」、「巻之拾」、「巻之拾壹」、「巻之拾貳 合弁植物」

○「大日本本草 草類編」 18枚（\_\_は空欄を示す）

「巻之貳 木賊類 石松類 苔類」、「巻之三 単子草之部二」、「巻之四 単子葉之部」、「巻之\_\_単子葉之部」、「巻之\_\_八」、「巻之拾」、「巻之\_\_合弁花類」、「巻之\_\_合弁類花四」、「巻之\_\_離弁花類」、「巻之\_\_離弁花類」、「巻之\_\_離弁花類」、「巻之\_\_離弁花類」、「巻之\_\_離弁花類」、「巻之\_\_離弁花類」、「巻之\_\_木賊類 石松類 苔類」、「参考之部」、「草類編 図」

○「大日本本草 海草類編」 1枚

○「大日本本草 菌類編」 1枚

○その他（『大日本本草』に含めたもの） 3枚

「大正二年八月起草 虫類有翅六脚 甲虫類 海産産貝類」、「大正二年八月起稿 鳥類編」、「魚類編 淡水産類 海魚類」

○その他（編集の参考、または『大日本本草』別巻） 2枚

「禾本科／莎草科 図」（同じものが2枚存在する）

表紙を付けて袋綴じ製本した冊子のままで残っているのは「大日本本草木類編」の巻之壹、巻之貳、巻之

三、卷之四、卷之七、卷之八、卷之九、卷之拾、卷之拾壹の9冊あった。

「卷之壹」の冒頭には、西涯による序と緒言が書かれている。その内容は『大日本本草』編纂の趣旨を具体的に示している重要な手掛かりとなるが、これに拠れば西涯はまず木類編から編纂を始めたことが分かる。但し木類編の「卷之拾壹」に跋文や奥書などはないので、これが最終巻だったかは不明である。抜けている「卷之五」、「卷之六」の本文部分はなく、「五卷」「六卷」と書かれた表紙のみが残っている。本文がないのは、一旦製本された後に再編集などの理由で分散したと推定されるが、詳細は後述する。

そして、製本した後にも更に内容を追加するため、新たに加筆した用箋が中に挟み込まれている箇所がいくつもあることも特徴的である。その他にも全体に朱筆で推敲を加えた跡が多く見られることから、脱稿した後にも最終的に納得のいく完成稿には至らないまま、途中からも内容が膨らんでいったように感じられた。

草類編には木類編にあったような序文は残されていない。また前述の通り草類編の表紙は巻数が未記入のものが多く見られるのが特徴的である。恐らくこれは、木類編を完成させてから草類編を作ろうとしたのではなく、木類、草類にこだわらず資料が入手できたものから逐次記述を進め、ある程度まとまった後で分類して草類編を編集しようとしていたからではないかと思われる。

また、巻数の書き方を仔細に見ると「卷之壹」と「第一続編」、「卷之三」と「卷三」、「卷之七」と「卷之七 単子葉之部」のように「卷之〇」と「〇卷」の二種の表記が見られる。ここからは二つのことが推定される。一つは、冊子の形で残っているのは「卷之〇」の形のものだけなので、「〇卷」の表紙が付いていた巻は一旦作られた後解体して「卷之〇」の表紙のものに再編集したのではないかと思われること。もう一つは「卷之七」と「卷之七単子葉類」のように同じ巻数に別冊が作られているのは、巻之七をまとめた後、内容の構成を変更し単子葉類植物を増補する必要が生じたような場合、次巻が既に作られていた等の理由から、その部分を別巻として編集されたのではないかと思われる。この表記の違いからも本資料が全巻の構想を立てて集中的に編集したものではなく最終的に「卷之〇」の表紙に揃えて清書したのではないかと推定される。

次に、『日本本草』の内容を示す具体的な資料はないが、下記の、残された12枚の表紙から推定される3点を挙げておく。

#### ○日本本草 木類編

「木類編」、「図 木類之篇第一」、「図及説第二」、「第九 第拾 木類之部」、「第拾 第拾壹巻」

#### ○日本本草 草類編

「草類編三」、「卷之八 単子葉」、「卷之九 単子葉」、「卷之拾四 離弁花」、「卷之拾九 合弁花」、「卷之貳拾壹 合弁花類」

#### ○日本本草 苔鮮類

「卷之貳拾五」

- ・全て表紙しか残っていないので、これも一旦編集された後で解体して別の著作（恐らくは『大日本本草』）の編纂に利用されているのではないか。
- ・苔鮮（蘚苔カ）類が「卷之貳拾五」なので、少なくとも20巻以上のボリュームがあった。
- ・木類編、草類編の後に苔類が来ているので、体裁は『大日本本草』と類似するが、動物昆虫、鳥類、魚類などとの関連が見えず、全体は植物のみを対象として作られたものではないか。

以上の点から『日本本草』とは、植物を対象に『大日本本草』と同様の趣旨で作られていたが、途中から収載する植物の幅の広がり、また動物類など植物以外の内容を加える必要を思い立ち、増補改訂の意図で『大日本本草』の編纂に引き継がれたのではないか。つまり、『日本本草』を原型とし、これを発展的に増補改訂したのが『大日本本草』であったと推定する。但し『日本本草』が書き始められた時期は不明である。

## 2. 『大日本本草』の特徴

表記や内容、編集の方針などに見える様々な特徴は成立過程を知る貴重な情報となるので、考察を加える前にまとめておく。

### 2-1 表記の揺れ

原稿の表記を通覧したとき、一部に不自然な表現の揺れが幾つか見られた。これも編集の状況を知る手掛かりと思われる。

例えば、歴史的仮名遣の揺れ、「さう」と「そう」、「かう」と「こう」の表記の混在などがそれである。

また訛化表現の揺れ（「えぞ（蝦夷）」→「いぞ」、「うす（薄）」→「いす」など）は、同じ植物名の表記であっても、用箋の違いによって見られた。明らかな当て字や誤字も散見された。現在、通常濁音や拗音で表記されるものの多くは清音で書かれていたが、必ずしも統一されてはいない。半濁音と濁音の区別も同様であった。

海外からの輸入品種は原語の発音を元にした音訳カタカナ表記になっているが、同じ品目が複数回出てくる場合でも濁音、半濁音、長音などの表記に微妙な揺れが見られた。但しその時代には音訳の表記がまだ確定せず、文献ごとに様々な揺れがあった可能性も考えられるので、西涯が参照した複数の文献での揺れが混在していた可能性もあるだろう。

但しこのような表現の揺れは、初めから一貫した原稿として書いていたのなら不自然に見えることで、この点からも原稿はかなり時間を空けてから内容を直して書かれたか、あるいは別に書かれた原稿を寄せ集めて再編集している可能性が高いように思われる。

その他に分類の名称では属名に「○属」と「○族」と表記の揺れが見られたが、これについて推定される理由は後述する。

また、一文の途中で不自然に1～2字抜けている部分が散見された。執筆の際に一旦空けて、後から調べて字を埋めるつもりだったものが、そのままになってしまったような不自然な空白である。一文が完結せず途中のまま終わっている不自然な文も散見された。これらの点も『大日本本草』の原稿が集中的に書かれたのではなく、かなり時間を空けて別々に書かれた原稿をつなげて一つの文章にする編集を加えた可能性が高いことを示すと思われる。

### 2-2 記載事項の項目立て

『大日本本草』では、一つの植物について記載される情報は最大で下記の12項目（**A**～**L**）に括弧することができ。但しすべての植物にこの全部の項目が書かれているわけではなく、中には形状などが一文で簡略に書かれているだけの場合もあり、記述内容の粗密には大きなばらつきが見られる。

項目名を見出しとして頭書し、それに続けて内容を書いているものが多いが、この書式も必ずしも統一されていない。初めから項目を決めていたものではなく、時間をかけて書き継ぐ中で記載する項目を確定させていったようである。

○『大日本本草』に挙げられた記載項目 ※ [ ] は項目名の揺れによる類似の名称

**A**品目の名称 **B**漢字名、一名、別名 **C**科名、属名 **D**提要 [ 総説 ] **E**各部位の解説 **F**適地  
**G**応用 [ 効用 ] **H**雑記 **I**培養 [ 栽培 ] [ 栽培法 ] **J**収穫 [ 採集法 ] **K**品類 **L**製造法、貯蔵法など

そこで、比較的多くの項目に記載があり、且つそれぞれに記載の特徴が現れている事例二つと、特注専用箋に印刷された項目を挙げて具体的に分析する。（ ）内は項目名として頭書される名称。分析のため各項目には**A**～**L**の記号を付した。**A**～**L**の順が不揃いなのは各原文の表記順によるものである。仮名遣いは原

文のまま。漢字は常用漢字に改め、読みやすさを考えて途中にスペースを入れた部分がある。また、原文に改行がある部分には／を入れた。

### 【事例1】しきみ

- Ⓐシキミ Ⓑ(一名・別名)ハナ東京 ハナシバ筑前 ハナノキ播州 莽草 櫛 Ⓒしきみ族  
Ⓓ(提要)暖地山中自生多シ 常緑喬木  
Ⓔ(幹)大木アリ高サ三四十尺 (枝)繁密(葉)楊桐葉ヨリ狭長ニシテ厚ク透明ナル細点アリ互生ス  
肌美シ 令凋マス断ハ臭気アリ 密生ス  
(花)三四月花アリ 大サ一寸斗七八弁小蓮花状ノ如シ 白色微ク黄ヲ帯ブ 透明ニシテ蠟ヲ引タル如シ  
(実)大茴香ノ形ニ同ジテ其臭気ハ異ナレリ Ⓕ(適地)山中自生多  
Ⓖ(応用)木材ヲ以テ旋作用ニ供ス 有毒植物ナレドモ実ハ八角ト名ケテ今貿易品トシテ輸出ス<sup>(1)</sup>香水  
ヲ製スル元料トス 線香 抹香ヲ製スルニ香料トシテ加フ 木葉ヲ粉末トシ下等ノ香料ニ加  
フ枝葉ヲ仏前ニ供ス  
Ⓖ(雑記)上古神前ニ供スル処ノサカキト云フは此シキミの木ナリト云フ 又今ノシキミハ上古ノサカ  
キ也ト云フ説アリ

### 【事例2】さつまいも (写真3、4)

- Ⓒさつまいも族 Ⓐさつまいも Ⓑ甘藷 カライモ九州 リウキウイモ九州  
Ⓓ宿根草 元南亜米利加ノ産ニシテ内地ヘ伝シハ慶長元和ノ頃ナリ 其後関東諸州ニ広ク栽培スルニ至  
シリハ享保十七年ヨリ同二十年頃ナリトイフ  
Ⓔ茎ハ平臥匍匐シ処々ニ根ヲ生シ多肉ナル塊根ヲナス 葉稍三角形ニシテ基脚心臟状ヲナシ茎ト共ニ紫  
褐色ヲ帯花ハ葉腋ニ梗ヲ抽クコト三四寸 頂ニ四五個ヲ着ク 形ひるがほノ花ニ似テ稍小ナリ 淡紫色熱  
帯地方ニテハ四時花アリ 雄 蕊長短不齊ニシテ葯白色萼片五裂ス  
Ⓖ甘薯品類  
三保 駿州地方ニ於テ久シク前ヨリ植ル処ノモノハ此一種ナリシニ近年善(未完)  
紀州 一名貉駄 此種ハ地質ノ良否ニ関セズ多量ノ収穫アリ 一般ニ駿州地方ニ於テ之ヲ植ユ 一  
反歩ヨリ大凡壺千五 百貫余ヲ取得ルナリ  
四十日 早熟種ニシテ蔓ハ青色ヲ帯ビ枝ヲ分コト短ク根塊ハ中形ニシテ淡紅色 其肉柔軟ニシテ絡ナ  
シ 甘薯中ノ早種ナリ  
川越紫赤 皮色濃紅色塊根大形ニシテ味ハ最佳美ナリ  
Ⓖ(栽培法)(※欄外に「駿州庵原郡袖師村鈴木春助報告」と加筆)  
暖地ニテハ三月下旬ヨリ四月上旬寒地ニテハ五月上旬麦畑ノ間ニ植付凡百十日又ハ二百十日ヲ経テ採  
掘ヲ始ム  
Ⓖ(甘薯ノ収穫)千葉県下ニテ下等ノ瘦地ニテモ十一月ニ採取スレバ一反ヨリ四百五十貫ヨリ上畑ニテ  
七百貫内外ヲ収穫ス 又九月中ニ採掘スレバ二百貫乃至四百貫ナリ  
Ⓖ(応用)塊根ヲ蒸シテ食シ 又之ヲ煮テ食ス 焼キテ直ニ食スルトハ通常ナレドモ細ク糸ノ如ク之ヲ  
切りテ料理ニ用ヒ油ニテ之ヲ揚レハ味甚タ佳ナリ 薄片トシ日光ニ乾シ粉末シ饅頭ニ製又乾シタルモ  
ノヲ貯蔵シ冬月ノ用トスノ飴ヲ製ス可シノ酒ニ醸シ之ヲ蒸留シ用及工業用トス可シノ澱粉ヲ含有スル  
量多シ之ヲ製シテ澱粉ヲ得可シノ茎及嫩葉ハ蔬菜トス可シ 沖縄群島の中ニ此ノ葉を野菜として常用  
するノ茎葉ヲ家畜ノ飼料ニ供ス多食スルモ害ナク常食トシテ飢ヲ凌クモノ多シ 実ニ有用ナル植物タ  
リ

【事例3】特注専用箋に刷られた記載項目 「 \_\_\_\_ 」は必要な内容を記入するための空スペースが取ってあることを示す。

- \_\_\_\_科 大日本本草 \_\_\_\_編 \_\_\_\_類 卷之\_\_\_\_
- Ⓐ種名\_\_\_\_ Ⓒ\_\_\_\_属 Ⓑ別名\_\_\_\_ 漢名\_\_\_\_ Ⓓ総説\_\_\_\_
- 根及地下茎\_\_\_\_
- 茎及枝\_\_\_\_
- Ⓔ葉 葉柄\_\_\_\_/葉脈\_\_\_\_/葉質(面/背)\_\_\_\_/全形/大サ\_\_\_\_ 辺縁\_\_\_\_ 先端\_\_\_\_/基脚\_\_\_\_
- 変形\_\_\_\_ 生存\_\_\_\_
- 花 配列\_\_\_\_/花托\_\_\_\_/苞\_\_\_\_/萼片\_\_\_\_/花冠\_\_\_\_
- 雄蕊/花糸\_\_\_\_/葯\_\_\_\_ 雌蕊/柱頭\_\_\_\_/花柱\_\_\_\_/子房\_\_\_\_/胚珠\_\_\_\_
- 開花ノ時期\_\_\_\_ 花ノ留存\_\_\_\_
- 果実\_\_\_\_
- Ⓕ雑説\_\_\_\_
- Ⓖ培養法\_\_\_\_
- Ⓖ応用\_\_\_\_

### 2-2-1 Ⅲ品目の名称・見出し、Ⅳ「漢名、一名、別名」

見出しの品目とともに〔一名〕を並べて書くのは『本草綱目啓蒙』の書式に倣ったものと思われる。複数ある漢字表記の併記や、方言を別名として載せているのも同様である。【事例1】にある方言名の「ハナ」「ハナシバ」「ハナノキ」はいずれも『本草綱目啓蒙』が出典と見られる。但し「ハナ東京」について、出典には「ハナ江戸」とあったものを修正して載せている。ただ、全てが同書を出典としている訳ではない。西涯は方言の重要さを認識していたようで、加越能、濃飛を中心に、他にも広く方言を採集する姿勢が窺える。別名の中には『本草和名抄』から引いた古名も多い。近代の植物書を参照していたとは言え、ここでラテン語で学名などが示していないことに、本草学に依る基本が感じられた。

### 2-2-2 Ⅲ科名、属名

分類に用いた植物の科、属の名称は現在では馴染みのない名称が並ぶ。後年の研究の成果によって分類が変化した場合もあると思われるが、これらは当時の植物書の記載を援用して西涯が分類したものである。筆者は植物学的な分類の専門知識を持たないので、この分類名の妥当性を検証できないことを断った上で、以下に資料として表紙に書かれた科属名を挙げる。

獼猴桃科、榲寄生科、檉柳科、莎草科、繖形科、槭樹科、龍膽科、幌菊科、乏呂乏呂樹科、蕃杏科、白前科、楠科、冬青科、柘榴科、丁香科、旋花科、鹿蹄草科、紫草科、桜草科、菊科、岩梅科、花葱科、磯松科、椅科、蠟梅科、蘭科、楊柳科、榕樹科、楊梅科、百合科、大和草科、山茶科、山茱萸科、柳葉菜科、桃金娘科、木蘭科、木犀科、毛茛科、眼子菜科、目木科、無患子科、紫葳科、紫茉莉科、紫金牛科、棟科、溝繁縷科、水韭科、水龍科、瑞香科、水馬齒科、衛矛科、松葉蘭科、松柏科、麻黄科、牡丹科、菩提樹科、酸漿草科、鳳仙花科、防己科、葡萄科、藤梨科、莧科、菱科、蓮科、灰木科、野牡丹科、禾本科、鼠李科、忍冬科、榆科、西蕃蓮科、錦葵科、肉豆蔻科、茄科、虎耳草科、曇華科、雛錫科、木賊科、燈芯草科、膳八樹科、田麻科、黄楊科、使君子科、地衣科、壇香科、蓼科、大戟科、橙橘科、蘇鉄科、千屈菜科、堇々菜科、睡蓮科、瑞香科、唇形科、蕁麻科、白花菜科、小蘗科、商陸科、旌節花科、省沽油科、棕櫚科、十字科、秋海棠科、仙人掌科、齊墩果科、胡椒科、越橘科、穀精草科、五加科、黄棟樹科、玄参科、罌粟科、芸香科、桑科、紅樹科、胡桃科、胡頹子科、樟科、金縷梅科、金粟蘭科、金魚藻科、金糸桃科、金糸科、木欄科、清風藤科、夾竹桃科、金蓮科、金虎尾科、石蒜科、鳶尾科、橄欖科、卷柏科、

殼斗科、鴨跖草科、樺木科、風露草科、鉤吻科、柿樹科、落葵科、槐葉蘋科、漆樹科、海桐科、馬鞭草科、馬齒莧科、馬錢科、馬兜鈴科、浮萍科、岩高蘭科、茨藻科、無花果科、石松科、石竹科、石楠科、蟻塔科、雨久花科、亜麻科、木通科、茜草科、藜科、梧桐科、三白草科、薯蕷科、芭蕉科、茗荷科、薔薇科、柯々阿樹科

近代植物学の分類体系からの摂取が見られる部分であるが、科名や属名の表記や分類の記載の仕方には曖昧さも見られる。また、本来なら見出しに挙げたすべての植物に対して○科□属といった分類の記載が必要だが、それが書かれていないものや科名・属名の一方しか書かれていないものなど不統一で、同種のものが連続して書かれている場合は、適宜省略されている箇所も見られた。

### 2-2-3 ㊦提要 [総説]

具体的に書かれたものと簡略に書かれたものの差が大きく見られる。植物の場合、多くは産地や生育地などが書かれている。この項目は、見出しを頭書せず内容を書き出しているものが多い。

### 2-2-4 ㊦各部位の解説

事例3に見られるように、この項目では非常に細かな情報を盛り込もうとしていることが窺われる。植物の部位の記載順は、書き進めるうちに定式化していったようで、西涯が植物の形状をどのように、またどの程度理解していたのかが分かる項目である。

### 2-2-5 ㊦「適地」、㊦「収穫 [採集法]」、㊦「培養 [栽培] [栽培法]」、㊦「製造法・貯蔵法」

㊦適地、㊦収穫 [採集法] を記載している品目はほとんどが農作物である。この項目を農業に必要な情報として重視し、詳細に書いている点は特徴の一つであろう。

この項が書かれている例は以下である。

- 「適地」を記載するもの  
イチジク（無花果）、ナツメ（棗）、ハウノキ（朴）、シキミ（楮）、ハシバミ（榛）、ブドウ（葡萄）
- 「収穫・採集法」を記載するもの  
ういきやう（茴香）、ロゾク（蘆粟）、もちごめ（糯）
- 「収穫並びに利益」を記載するもの  
みかん（柑）
- 「採集法」を記載するもの  
シラモ、テングサ（石花菜）、ふのり（鹿角菜）、ムラサキフノリ（紫苔）

㊦培養、栽培などの内容を記入している品目は145点あった。ここで用いている「培養(法)」という用語は、「栽培、育成法」といった意味である。農産物では「栽培法」とする場合もある。

農産物では栽培方法などが詳細に書かれているものが目立つ。これは類編書の中に農作物に関するものが複数あったように、西涯自身がこの方面を重視していたためと見られる。『大日本本草』では類編書の編纂時に得た豊富な知識を援用していたからであろう。また、園芸品種の花卉などに栽培法の書かれているものが多いのは、西涯自身が茶を嗜み、茶室内の設えなどの花瓶花にも関心が高かったことが影響していたと思われる。

㊦製造法、貯蔵法の記載は、加工や保存して利用する農作物に必要な知識として、作物それぞれの利用法に関連した具体的な記述がなされていたことが分かる。

- 製造法について記載するもの

「白蠟製造法」（イボタノキ）、「オリーブ油製造法」（オレイフ）、「点茶用躑躅炭製造法」（アサギツツジ）、「干葡萄製造法、ジャム製造法」（ブドウ）「李砂糖漬製造法」（アンズ）、「樟腦製造法略説」（くすのき）、「パン製造法、藁紙製造法」（コムギ）、「甘藷澱粉製造法」（さつまいも）、「タケノコ缶詰製造法」（ダイモンタケ）などがある。

- 「果実貯蔵法」を記載するもの  
クリ
- 「貯蔵法」を記載するもの  
ナツミカン
- 「梨果を蓄ふる法」を記載するもの  
梨

### 2-2-6 ㊦「応用（効用）」、㊧「雑記」

応用が書かれている品目は1,018点見られ、全数に対して約20%になる。薬用、処方、可食、食味、材木の用途など実生活にどのように役立つかを具体的に書いている部分である<sup>(12)</sup>。実生活、実体験に即している内容も多く、実学的という点では本草学的内容と見てよいだろう。但し『大和本草』などからの引用では科学性に欠ける部分もある。とは言え『大日本本草』が実学に基づき、民用厚生を重視する本草書との接点を最もよく表している項目である。

過去の文献に書かれていたことを記述することは、決して旧記にあるから正しいと盲信することではない。それを一知識として紹介した上で、近代の植物書にも照らし更に役立つ知識の選択肢とする意図で書かれているものである。言い換えれば、西涯は、本草書の記述を決して古くて役に立たなくなった知識ではなく、近代の植物学者たちが捨象してしまった部分に新しい理解を深める智恵と認識している。『大日本本草』編纂の背景に、それらをまとめて書き残しておきたいという思いがあったように思われる。

応用の内容は、本草書や古典など旧記からの引用や、これが書かれた当時（明治末～大正前期）の知識理解に基づくものである。当然その後の研究の進歩や新たな発見によって現在では誤りとして否定されるものも含まれるが、逆に現代の視点からすれば、そこに当時の知識の水準や時代相を知る歴史資料としての価値が認められる。

雑記が書かれている品目は234点ある。植物そのものの分析的な説明ではなく、トピックスになるような補足的な内容、教養になる歴史や文芸との関わりや古典からの引用を付け加えている。これらは植物図譜や近代植物学の文献には無い内容なので、応用と同様に『大日本本草』を特徴付けている内容と言える。近代の植物書に比べて本草書的であり、「本資料」は実学的な要素と教養的な要素が含まれる独自の編集方針に基づいていることがよく分かる。引用文献では史書、歌集、歌論書、随筆など多くの和漢籍が出典に挙げられており、直接原典を参照したものの他に『古今要覧稿』（類書）も利用したことも分かる。

### 2-2-7 ㊨「品類」

改良品種などによって、新たに命名された品種名だけではその原種の植物が何か分かり難い場合があるので、亜種、近縁種に相当する果樹、園芸作物などを「○○類品」と見出しを付けてまとめて書いている部分である。92品目に品類が書かれているが、そこに挙げられている品種には明治以降に西洋種として輸入された新品種も多い。この項目は採集する山野草ではなく、栽培する園芸種や品種改良が進められていた農産物に多いようである。因みに前述の【事例2】さつまいもでは、「三保」、「紀州」、「四十日」、「川越紫赤」の品種名が紹介されていた。

以下に品類の記載がある92品目を挙げる。

- 花卉（樹木・草花）

「キリンカク」、「あなばな」、「せんご」、「柴胡」、「もくせい」、「サザンクワ」、「ひいらぎ」、「クチナシ」、「カラタチバナ」、「ふぢ」、「はぎ」、「うつぎ」、「フサスグリ」、「うばめがし」、「柯樹」、「つた」、「ふよう」、「紫薇」、「キコガンピ」、「アカシヤ」、「花桜品類（単弁之類）」、「花桜品類（八重花桜）」、「木瓜」、「野薔薇」、「玫瑰」、「三茶」、「もちのき」、「南燭」、「水仙」、「アマリリス」、「洋種水仙」、「ひあふぎ」、「芭蕉」、「すすき」、「ボタンキヤウ」、「みやまうづら」、「かはほね」、「はす」、「南天」、「ゐのこづち」、「ははきぎ」、「あかざ」、「たで」、「りんだう」、「あさぎ」、「ひめゆり」、「なるこゆり」、「睡蓮」

□畑作物

「にんじん」、「たまねぎ」、「山慈姑」、「甘蔗」、「つくねいも」

□果樹

「桃」、「水蜜桃」、「杏」、「李」、「梅」、「梨」、「林檎」、「ミザクラ」、「葡萄品類西洋ノ部」、「枇杷」、「柿」、「栗」、「無花果」、「石榴」、「ナツメ」、「みかん」、「かうじ」、「きんかん」、「回青橙」

□工芸作物

「綿」、「はぜ」、「楮」、「がんぴ」、「桑品類早生種」、「甘藷」

□用材

「杉」、「ケヤキ」、「かし」

□穀物

「ひえ」、「あは」、「タイトウゴメ」、「コムギ」、「大麦」、「とうもろこし」、「蜀黍」、「ロゾク」

□海藻

「てんぐさ」

## 2-3 絵図

本資料には西涯自身が描いた絵図が多数添付されている。絵図には彩色画と墨絵の線画（写真5、6）が見られる。描かれた時期に拠るためか巧拙は分かれるが、総じて近世の本草図譜に見られる挿絵と遜色のない写実的な彩色写生画である。植物の特徴を示す挿絵として描かれたものだが、名称が書かれていない場合も含まれていた。

殆どに落款はないが、陰刻で「谷村」、陽刻で「西涯」と彫られた2つの落款（写真7）、あるいは「秋香亭」と彫られた落款（写真8）のあるものが十数点見られた。西涯はもともと絵画を好み、中国の文人画譜の模写をよく描き、晩年は描き上げて気に入ったものにだけ落款をしていた<sup>(13)</sup>から、添付された絵の中で落款があるのは、膨大な絵図の中で僅かに満足できた絵だけだったのかもしれない。「秋香亭」も西涯の号の一つと見られるが、これを用いていた時期が明らかになれば、『大日本本草』の編集期間をより正確に推定する材料の一つになるだろう。

西涯は植物愛好だけではなく、若い頃から茶道を嗜み美術品収集の趣味を持っていたので、茶人を通じた文人趣味に造詣の深かったようである。明治36年（1903）以降、京都に住む長男一太郎から送られた名家の売立目録を精読して書画骨董に精通し、金沢を訪ねて名品を鑑賞していたという<sup>(14)</sup>。これらを通して鑑識眼や審美眼が育成され、絵に対する見識が高かったことも絵図制作の背景にあったと思われる。

当初、これらの絵図は植物図説など図鑑の挿絵を模写したものが多く多かったものと思っていたが、恐らくそれは少数で、殆どは自身が腊葉や現物をスケッチしたであろうと思われた。そこから微妙な違いを描き分けている目と描写力が窺える。

西涯は光瑤がまだ琳派の画家山本光一に入門し金沢にいた頃から、昵懇だった光瑤の父石崎和善との関係もあって、物心両面でその修学を支えていたという<sup>(15)</sup>。後年には花鳥画を得意とした光瑤との接点に、西涯からの影響とスケッチが関係していた可能性も想像されるが、この点は美術史の研究者による今後の研究を待ちたい。

## 2-4 内容の特徴

前述した収載品目の全数4,826件についてその内訳を見ると、「植物類（菌類を除き海藻を含む）」4,245点、「菌類」11点、「鳥類」166点、「動物類（鳥類を除く）」41点、「貝類」16点、「魚類」150点、「虫類」114点、「飯、餅等加工食品」10点、「古銭・古物」2点と、非常に多岐に亘っている（表2）。元来が植物学の職業研究者ではなく、目指した範が本草学にあったのならば、これらはその範疇として不自然ではないが、逆に近世本草学の守備範囲にあった「鉱物」についての部分が残されていない点には疑問が残る。古くから福光は玉石の産地であり、特に大西村などは江戸時代から瑪瑙の生産で知られ、それが地域的な産業になっていたからである。意図的に除外していたとも考えられるが、その詳細は分からない。

類編書がいずれも植物書であったのに対して、『大日本本草』では前述のように多様な天産物、加えて加工品や古物などを加えているのは、本資料を『大日本本草』と名付けたことから分かるように、『大和本草』や『本草綱目啓蒙』など近世の本草書の内容を意識していたためであろう。西涯の興味は植物そのものに止まらず、教養の重要性や本草学が持つ実学、民用厚生に資する役割に意義を感じていたことが、このような対象の拡大につながったのではないかと思われる。これらは西涯にとっても新しい分野への挑戦とも言え、本草学に知的好奇心を刺激された近世の教養人と同様の思いがあったと想像する。

ここで記述の特徴を植物類に限って見てみると、一般的な植物書には見られない特徴として次の4点が指摘できる。

- (1) 当時日露戦争の賠償で日本領になった樺太を初めとする北海道地方の植物や、日清戦争で領有した台湾、そして沖縄や小笠原など南方の植生に高い関心を持っており、直接現地に手紙で照会したり新聞や写真集などからも情報を集めたりしていた形跡がある。
- (2) 福光近郊の医王山や立山、白馬、槍ヶ岳などの多様な高山植物、及び日本各地の山や登山に関連する情報への興味が非常に高かったことが窺える。高山植物を採集し腊葉を制作しているが、高山植物の種類の豊富さ、葉の形や花の色、背丈の長短などの変種について、詳しく数多く収載している点に西涯の高山植物に対する博物的な知識の豊富さが分かる。
- (3) 農作物について記述は、作物の品種や用途については他と比べて非常に内容が詳細なことから、農業には高い関心があったと思われる。そのため農作物や果実、材木など身近なものを多く挙げ、特に用材となる樹木の用途が詳しい。
- (4) 盆栽や庭木、観賞用花卉の種類の多さ、瓶花や生垣、庭園の花、樹木の説明には細やかな視点が感じられる。知人を訪れて見せてもらった庭木や盆栽を写生したことを添え書きした絵図も見られる。

これらは本書を編集する動機にも関係することで、B-1群資料の分析から考察した点については後述する。

「植物の特徴」は、明治40年前後から多く作られた植物図譜類からの情報を元に各部位の外形的な分類や生育の仕方などを抄出して書かれたものであろう。その際に参照したと見られる文献のリストがB-1群資料にある。それ以外にも参照した資料があったに違いないが、少なくとも『大日本本草』に反映する知識は当時最新の植物学の情報を学んで得ていたことは分かる。それに近世の本草書の知識が加えられた訳である。『大日本本草』の編纂は、通常見られる植物を網羅的に載せるとともに農作物や高山植物といった専門的な部分も加え、それまでの植物図鑑では扱っていない種類まで取り込んだ大著として企図したものと考えられる。

これらの点を総合すると、『大日本本草』は、西洋の近代植物学と実学であった日本の近世本草学の記述を含み、研究者の視点ではなく、生活の豊かさにつなげるための植物知識の啓蒙を目的としていたと言えるだろう。

### 3. 『大日本本草』 編纂の経緯

本章では『大日本本草』の編纂がどのように始められ、どのような過程を経て現存の形にまとめられたのかを考察する。

結論から言えば、『大日本本草』は、何も無いところから編纂を始めたものではなかったと見られる。西涯はそれ以前に植物に関する教養書、啓蒙書を作成しており、それに不足を感じたか、あるいは途中でそれを超える内容を着想したところが出発点であったと考えられる。そして、編纂を始めた後からも盛り込みたい内容が膨らみ、結局は未完のままになったのではないかと考える。

そこで次節以下、調査で得られたB-1群資料の概略を紹介し、それを引用しながら編纂の動機と、具体的な編集作業の進行について考えてみたい。

#### 3-1 「B-1群資料」について

「本資料」に混在する、本文草稿以外の多種の文書類である。冊子や書簡の一部、表紙のみが断片的に残っているもの、一枚の中に複数の異なる内容が雑多に書かれたメモの類が含まれているもので、整理の段階で内容を分析し2つの群に分類した。

西涯にとって『大日本本草』が最終的な到達点であったと考えれば、そこに至る前に執筆を試みていた「類編書」に関する情報もその中に含まれる。それらは、自らの植物に関する知識や研究の成果をまとめて残したいという気持ちの強さが伝わるもので、同時に『大日本本草』編纂の動機やその過程を知る手掛かりでもあった。

そして、B-1群資料を精読して気になった単語があった。西涯が沖縄や台湾方面へ現地の植生を照会するため書き送った書簡（含下書き）の中に見られた、西涯が長年を掛けて取り組み、漸く完成が近づいてきたものとする「日本植物書」という言葉である。類編書の中にこの書名は見えないのだが、これがどういうものであったかを考えることが、最終的に『大日本本草』編纂の動機につながるように思われた。

まずB-1資料群20件を、以下のように①～⑳の番号を付け資料的な性格から分類して、編纂の動機、編纂過程の考察の中で引用し、分析を加えていくことにする。なお、『 』は書名又は元の標題。( )は筆者が形態等について補足したものである。

#### (1) 「類編書」と見られる文書類

- B-1 ① 『『植物書編纂之心意』(大日本本草草類編卷之八表紙裏面に書かれた表紙のみ)
- B-1 ② 「植物学者への苦言、植物応用提綱」
- B-1 ③ 『『日本農産植物誌 凡例』』
- B-1 ④ 「居家必用日本本草、第一首卷提要目録」(凡例部分のみ)
- B-1 ⑤ 『『農産植物誌 織緯類』』(部分)
- B-1 ⑥ 『『日本農業植物誌 壺 穀類編』』(部分)
- B-1 ⑦ 「大日本本草木類編序 緒言」(「大日本本草木類編 卷之壹」の巻頭)

#### (2) 編纂の過程で書かれたと見られる文書や文献(特に植物学や本草学に関するもの)

- B-1 ⑧ 『『植物新篇』』
- B-1 ⑨ 「植物学・本草学参考文献リスト」(部分)
- B-1 ⑩ 「日本山林第一位樹木のメモ」(部分)
- B-1 ⑪ 「科属分類記述の進捗に関するメモ」(部分)
- B-1 ⑫ 『『普通植物図譜』』に対する意見文(書簡下書、部分)
- B-1 ⑬ 『『BOTANIC GARDEN OF THE IMPERIAL UNIVERSITY YOKYO, JAPAN LIST OF SEED COLLECTED

in1893～1894』(版本。西涯がタイトルを「東京帝国大学植物園種子苗木目録」と訳して墨書)

### (3) 高山植物や日本各地の山岳に関する文書類

- B-1 ⑭「高山植物に関する照会文」(書簡下書、部分)
- B-1 ⑮「雑誌に掲載の登山、高山植物関連のメモ」(部分)
- B-1 ⑯「『植物採集記』」(立山山中の高山植物を列記、関連するメモ等)

### (4) 南方の植物に関する文書類

- B-1 ⑰「八重山島司黒川作助宛書簡下書」(推敲の跡多数あり)
- B-1 ⑱「宮古島司橋口軍六からの返信」
- B-1 ⑲「台湾総督府殖産局田代安定宛照会書簡下書」(推敲の跡あり)
- B-1 ⑳「『植物類編／台湾植物及同地の物産記事』」(部分)

## 4. 西涯の人物像と『大日本本草』編纂の実際

『大日本本草』には、西涯の教養や交友関係などの個人的な環境も影響していたように思われた。ここでは編纂の遠因となる西涯の人的、地域的な教養の背景をまとめておきたい。

### 4-1 谷村西涯の知的背景

西涯は、前述のように幕末に福光で有力な麻布問屋に生まれ、幼少時代には宮永菽園の塾で学んでいる。宮永菽園<sup>(16)</sup>は福光在の優れた儒学者で、この時代福光の旧家の子弟の多くがここで漢学や儒学を学び儒学的教養を身につけ、親密な交友関係を結んでいる。塾での勉学を通じた人格形成と教養、人間関係が近代初期の福光発展に貢献するとともに、その後の事業や生き方にも影響していった。菽園に学んだ人材が、今日に続く福光の文化的な風土を育てていたとも言える。西涯にとっては、共に菽園の門で学んだ福光旧家の子弟である松村精一郎や清治、石崎和善との交友がその後もずっと谷村家、松村家、石崎家が代々の関わりを持つ重要な縁になったようである。西涯が好学の教養人であったことと地域の社会事業や政治活動に関わっていったことにも、この三者が大きく関わり、それは次の世代で谷村一太郎、松村謙三、石崎光瑤といった財界、政界、美術界で日本を代表する人材の活躍につながっていた。中でも石崎光瑤と西涯とは絵画や登山を通して高山植物への興味の広がりや面でも様々な接点が見られた。『腊葉帖』には明治41年(1908)前後に光瑤が立山や白馬で採集した高山植物の腊葉もあり、西涯の孫順蔵が立山へ植物採集の登山をした際には光瑤が付き添うこともあった<sup>(17)</sup>。

西涯の福光での社会貢献については『福光町史』に詳しい<sup>(18)</sup>。教育にも関心が高く福光小学校の設立に当たっても寄付するなど尽力してきたが、明治41年に還暦を記念して福光小学校に植物標本作製費として15円を寄付している。これは明治36年に小学校に学校園が設置され観賞植物や果樹、薬草を栽培していたので、これを元に標本作製することで、子どもたちに植物への知識関心を高めたいという思いがあったという<sup>(19)</sup>。地元の名士としての立場と、自身がそれまでも数多くの植物標本を制作してきたことで、その価値を理解していたことが背景にあったと思われるエピソードである。

「本資料」を調査しながら西涯についてまず感じたことは、ディレタントとしての知的好奇心の旺盛さである。驚くほど筆まめであり、興味を持った分野を独学する基本は、様々な文献や見聞から得た情報知識を筆写して書き溜めていくことにあることは、「本資料」を通覧して容易に想像できる。そして成果を著述し、自らの知的足跡を残すことに高い欲求を持っていたように感じられた。

このような学びを通して、新しい植物学を吸収し『大日本本草』に見られるような植物の分類や部位の構造に関心を持ち、加えて新しい情報は雑誌や新聞などから収集し、植物の中でも明治以降に輸入された外来品種にも詳しい情報を得ていたのであろう。

明治30年代以降は、東大を中心に植物学者が輩出し日本での植物学の研究成果が図説や図鑑などの刊行で普及し始めた頃である。西涯は、東京の書店（丸善）からそのような資料を購入して熟読していたことが窺われる。それに加えて本草学的な知識にも詳しく、凡そ本草学は過去の文献を博捜し、対象に関連する記述を抄出して定義しようとする文献学的な面を持っているので、西涯の独学の方法は本草学者のそれに近いものであったとも言えそうである。

植物への関心の高さが前提にあったのは言うまでもないが、一般的な植物からかなり専門的な高山植物や遠隔地の植生に及ぶだけでなく、植物を生活の豊かさに結びつける実学として農産物へも関心が高かったことが窺える。社会事業家、又地元の政治家の視点から地域の農業生産向上に関心を持っていたのかもしれない。それらの幅広い関心が『大日本本草』に反映されているように思われた。

筆者は近世本草学の本質を「天産物を、人の豊かさにどう役立てられるかという視点から捉えようとする営為の総体」と考えてきたが、西涯と本草学との関係を結びつけている視点が、正にここにあったと考える。

### ●地域性と時代性の視点

西涯は明治17年（1884）県議会議員となり、のちに長く福光町会議員を務めるなど政治への関心が高かったようである。『福光町史』には公職の活動以外にも個人的に学校建築費の寄付、火災罹災者や窮民救助のために義援金を送り県から賞状を受けたり、金沢との道路開削等の功で富山県初の藍綬褒章を受章したりするなど、福光の産業や政治の発展に重要な役割を果たしたことが記されている。この、地域への貢献の視点はここでは考慮する必要がある。農業生産の向上は地域産業の発展につながる<sup>(20)</sup>。福光地域からの北海道への開拓移民が明治20年代後半から日露戦争後にかけて増加する背景にも地域の農業生産の問題点があったと考えられることから、趣味的な植物への関心からは離れるが、西涯にとって農業と北海道は『大日本本草』を編纂する上でのキーワードとなった可能性を指摘しておく。

## 4-2 『大日本本草』が編纂される前段階

『大日本本草』を、それ以前に書き進めていた「類編書」を再編集する形で編纂したものだったと考えると、その動機にも興味を持たれる。そこでB-1資料を分析し、動機ともにこれが書かれた時期や最終的に現存の形にまとめられた経緯について考察する。

### 4-2-1 前段階での知識、情報の収集

「植物学・本草学参考文献リスト」（B-⑨）が残っており、西涯の植物学知識がどのような文献から得られていたのかを知ることができる。近代植物学関連の書籍には次のようなものがある。

- ・伊藤圭介『日本産物志』（文部省、明治6年～10年）
- ・伊藤圭介『日本植物圖説』（花繞書屋、1874）
- ・内務省博物館『博物館列品目録』（内務省博物館、明13-15）
- ・文部省編輯局『商業博物誌』（文部省編輯局、明18）
- ・帝国大学理科大学植物学教室編『大日本植物志』（東京帝国大学、1900-1911）
- ・田中芳男等『有用植物図説』（東京大日本農会、明治24）
- ・斎田功太郎編『応用植物学：中等教科』（文学社、明26）
- ・斎田功太郎編著『大日本普通植物誌』（大日本図書、明30）
- ・牧野富太郎『新撰日本植物図説』（敬業社、明32-36）
- ・矢田部良吉編『日本植物編』第1冊（大日本図書、明33）
- ・梅村甚太郎『富士山植物目録』（東洋社、明35.8）
- ・谷田部良吉校閲／松村任三編『日本植物名彙』（丸善、明17）
- ・宮部金吾／川上滝弥『北海道森林植物図説』（裳華房、明35）

- ・齋藤賢道『工業用植物繊維』（博文館、明36）
- ・川原慶賀『草木花実写真図譜』（前川善兵衛、不明）※天保7年刊『慶賀写真草』の改題再刊。
- ・矢沢米三郎『帝国植物学提綱』（金港堂、明32）
- ・三好学『実験植物学』（富山房、明42）
- ・三好学『訂正 植物学講義』（富山房、明32）
- ・松村任三『日光山植物目録』（敬業社、明27）
- ・松村任三『本草辞典』（敬業社、明25）
- ・松村任三・藤井健次郎『教科適用 普通植物図』（開成館、明治35）
- ・岡村金太郎『日本藻類図譜』（岡村金太郎、1907）

この他に『BOTANIC GARDEN OF THE IMPERIAL UNIVERSITY YOKYO, JAPAN LIST OF SEED COLLECTED in 1893 ~ 1894』（B-③）を参考にしていただいたものと思われる。タイトルは英文だが、表紙には西涯が書いた邦文題「東京帝国大学植物園種子苗木目録」と、裏表紙には「谷村蔵」の墨書がある。

松村家に移された西涯の旧蔵書にも以下の植物書がある。これも西涯の手沢本とすると、その教養形成につながったものである。

- ・和田維四郎『金石学』（農商務省博物館、明治15）
- ・松原新之介『植物綱目撮要』（晚翠園、明治11）
- ・奥川蔵『植物略解』（文部省、明治7）

『大日本本草』に多く引用される『本草綱目啓蒙』や『大和本草』は本草学知識の基礎文献になっているが、雑記での引用には『古名録』が出典のものも多い。同書は紀州の本草家畔田翠山が天保14年に書いた稿本を明治18年以降に活版で刊行したものであるため、本草学に関してもそのような新しい文献を参照していたことが分かる。

#### 4-2-2 「類編書」から分かること

西涯が『大日本本草』以前にも複数の植物書の作成を試みていたのは前述の通りである。しかしそれらの書かれた時期や順序などはよく分からない。標題から推定される内容や趣旨には違いが見られ、表紙のみ、凡例のみなど、現存する形態も様々である。本項ではB-1群資料を元にして『大日本本草』編纂につながる情報を抽出する。

##### （1）動機につながる「植物への関心」

『植物書編纂之心意』（B-1①）は「大日本本草 草類編 卷之八」表紙の裏面に書かれ、表紙のみが残るもので、その具体的な内容や書かれた年代は不明である。タイトルから推察するに、西涯の植物書編纂に対する考え方を表明した冊子だった可能性がある。唯一現存する表紙は、『大日本本草』を編纂する際に解体した後で裏面を再利用したものであろう。比較的早い時期から、植物についてまとめた著作を執筆する意図を持っていたことを窺わせる。

##### （2）農業・農作物への高い関心を示すもの

農業への関心が高く『大日本本草』で農作物の記述が詳細なのは、それ以前に農産物に関する類編書『日本農産植物誌』が編纂されていたからだとと思われる。「日本農産植物誌／凡例」（B-1③）と『農産植物誌 織緯類』（B-1⑤）は凡例の一部、目録、本文の一部が、『日本農産植物誌 壺穀類編』（B-1⑥）は表紙のみが残っている<sup>(21)</sup>。凡例は最後の部分が欠けているが、概ね西涯が農作物の実用的な知識を重視していたことが分かる資料である。以下、まず全文を引用する。[ ]は欠字。□は判読不能。漢字はすべて常用漢字に改め、適宜読点を補った。下線と番号は筆者による（以下、本章での引用文の体裁は同様）。

日本農産植物誌／凡例

- 一日本国ハ、風土天候ノ最モ善良ナルニ加ルニ土質肥ナルニ依リ、此土ニ生産スルモノ穀菜桑麻木綿諸木類ニ至ルモ亦絶佳ナラザルナシ、殊ニ開国ノ初ヨリ農業ニ勉力シ実地ノ経験ヲ為事数千年、其間耕種ノ法ニ於テ自然発明スル処多、其農家ニ於テ種芸スル処ノ穀菜桑麻ハ農産植物ノ中ニテ其精ヲ抜キ英ヲ選択スルモノニシテ、今日ニ至リ広ク他ニ求ムルモ（惜脱カ）ラクハ此レトノ品ニ優ルモノ無キニ似リ、然リト雖モ世ノ開明ニ従イ昔日大イニ世ニ於テ益有ル品モ今日其用処ヲ失シ、往古見ザル品ニテ今日大イニ生業上ニ欠ク可カラザル物多トス、旧習ニ由テ今日ノ新産物ヲ知ラズ、今日ノ新産物ヲ知テ昔日ノ有益ナルヲ知ラズハ両ナガラ農等ノ為ニ遺憾トス、故ニ其書、勉メテ日本国ニ於テ方今種植スル処ノ諸物ト山野海底ニ自然ニ生育スル草木ヲ採テ、以テ①我人生営業ニ有益ナルモノハ新古ノ別ナク併テ記載セントス是ガ形状ヲ詳ニシ、産地ノ土質培養製造貯蓄功用ノ法、及販売ノ広狭ト併テ之ヲ記載セントス、一従来山林養樹ノ法ハ我国ニ於テ諸家未ダ其法ヲ記スルモノナク、今日山林養樹ノ方法ヲ記セントシルニ、慍ニテ参考ス可キノ書ナク、且養樹ノ術タリ数十年ヲ経ルニアラザレバ実験スル事難タク、今此書ハ自ラ植栽ス未ダ成材トナラザルモ確實ノ識植ヲ為タル説ト火老ノ伝説ニ依テ其ノ尤モ有益ナルヲ記
- 一海産植物ノ如キ人民ノ益ヲ為ス少ナシトセズ諸属ノ諸品ハ皆自然産ニシテ人力ヲ以テ養植スル能ハザルニ似タリ、昔日ヨリ紫海苔ハ東京湾内ヲ限り是ガ養殖ヲ計ル者アリ、其ノ他聞所ナカリシニ近日諸種ノ海藻類モ実種ヲ栽ヘ或ハ根株ヲ移スノ法アリト聞ク、此書未是トノ方ヲ得ズ、故ニ独リ形状功用ヲ記スルノミ
- 一菌類茸類ノ如ク植産ノ中ニ属スルヲ以テ此篇ニハ其出産ノ額大イナルト貯蔵シ販売ノ用ヲ為シ益アルノ品類ハ之レヲ記スト雖モ、産額少ナク民用ニ益ナキノ品ハ是レを載セズ
- 一②近年舶載ノ菜蔬諸果物禾草ト未ダ実地ノ培養耕種ノ法ヲ詳ニセザル品ハ洋西ノ農書ニ依テ培養ノ法ヲ記セリ。実地耕種確實ナル法ハ他日ヲ以テ増補セントス
- 一樹木ノ如ク其用ヲ以テ記載スル時ハ点数甚ダ多シト雖此篇ハ建築戦艦構造ノ用、或ハ成長ス安クシテ早く成林トナル薪材及ヒ諸種ノ菓木トナリ
- 一我邦ニ於テ今日最モ農家ニ於テ培養栽植スルハ米麦菽豆ヲ以テ第一トス、③故ニ此書又穀物ヲ以テ初編トシ桑綿麻苧ノ織緯類ヲ以テ之ニ次グ
- 一④此書ノ主意ハ専ラ農産ニ類属スル植物形状功用トヲ詳記スルニアルト雖モ又是ガ耕種培養ノ略説ヲ附記シ読者ヲシテ益々生産ニ注意アランヲ願フ、夫レ農（以下欠）

この凡例から読み取れるのは、ここには既に『大日本本草』の内容につながる原型、西涯がイメージする植物書の骨格が示されているということである。つまり『大日本本草』はこの延長線上に位置し、植物に本草学の持つ博物学の要素として動物類や食品などの諸情報を加えた体裁にしたと見ることが出来る。下線①から分かる西涯の農業重視には、栽培や新品種の導入や材木利用法などの旧来の利用法をきちんとまとめて書いておくことによって、そこから新しい用途や利用の可能性につながるという見方があったようである。

次に下線②に注目すると、農産物には新たな舶来外来種の導入とその栽培技術の知識を重視していたことが見える。増産と農業生産の向上にかなり強い決意を持っていたように感じられる部分である。

現在「農産植物誌 織緯類(部分)」(B-1 ⑤)、「日本農産植物誌 穀類篇」(B-1 ⑥)が残っているのは、下線③にあるように、まず穀物を初編とし「桑綿麻苧ノ織緯類」を次に置いたとする点に符合する。だがそれ以降の巻が残っていないのは、織緯類まで執筆を進めたところで新たな構想が膨らんだためか、内容を拡大した他の著作に再編集され、その後更に『日本本草』か『大日本本草』へ引き継がれたのではないかと思われる。

繊維工芸作物が食糧の次に来ているのは、南砺地区が福光麻や八講布、五郎丸布の生産、また養蚕が盛んであったという地域性が反映されているためだろう。「織緯類」の目次には37種の植物名が挙がるが、実際

に内容が書かれているのは26種のみで、品名のみを書き内容が白紙になっている頁もある。部分的に残る本文で、全草の形状を簡略に説明したあと「培養法」と「効用」を項立てして書くのは、後の『大日本本草』の体裁に近い。本書が栽培方法の教示と、良質品種の導入による生産の増大を図る意図で作られたとすれば、実用的な農書を目指していたと見ていいだろう。

### (3) 実学の重視 一般向けの啓蒙

実学を重視した編集方針は他の例からも分かる。「居家必用日本本草、第一首巻提要目録」(B-1④)は、やはり書かれた時期は不詳だが、「居家必用」と「日本本草」の名称が使われているところに注目する。

「居家必用」とは、中国で作られた日用類書『居家必要事類全集』などを意識したものと思われるが、同書は元来家庭生活で心得ておくべき知識を絵入りで解説した実用書で、日本でも寛文13年(1673)に訓点をつけたものが京都で出版されている。西涯は恐らくそれを目にしており、同書の意図に倣って一般向けの分かり易い植物啓蒙書の意で「居家必用」の名称を付けたものと思われる。これは後の『大日本本草』とも内容的につながる。

この書名を、一般家庭に向けて書かれた「日本本草」とするならば、明らかに一般向けの実用書ということと、それが近世の本草書の流れを汲むものであることを強く意識していたことに注目する。「第一首巻提要目録」の部分は標題が書かれているだけで内容は不明である。

以下に全文を引用する。

居家必用日本本草

- 一 此の書たり、専ら日本国産の①植物及動物鉦物及製造食品の功を記載するものにして、単に理論を主とせず日用人家に於てかく可からざる物をも(う脱か)羅せんことを□□やり
- 一 ②植物に關したる記事ハ他の植物学者の分類綱紀に従ひ其種類に分ちたれども、是又効用用材觀美玩用等は種芸の方法をも併せて記し、扁者是も力を尽せし所なりと雖も浅学にして及ばざる処甚多し
- 一 動植物の事を記すには自然化学(ママ)に關連する論説にわたらざるを得ず。記者止を得ず其の大略を記し、読者その評説を極みんとする人ハ各々其専門の学ニ從事考究あらんことを希ふところなり
- 一 製造品ハ世の文明ニ從ひ日日其数を倍加し有機化学に關し物品の製出せらるるもの実に可驚数多の發明にては此後限りあらざるべし、記者其尤も有用にして主眼となるものを載せ、他省略して記さず
- 一 世に薬学の書多しと雖とも独り薬物を主として日用の品を記さず、化学また然り、応用化学書又然り、殊に新事物を論ずること詳にして古代より用来る品々して日用之(未完)
- 一 ③植物扁に於て日本本嶋より北は北海道千島、南ハ台湾諸島の諸品一も漏らすなく是を詳細記述せんとする事一人のちから豈是を解するいとま有らん哉。為す可からざることに徒に年月を費し終に旧記の書をと□の□を遺憾と思ひ既に得るところ草木木本ヲ併せ二千数百種ニ及ぶも尚詳明ならざる物多し。其の及ばざる処は大方の識者の教を受け増補大成なさん事を希望に□へ得(未完)
- 一 動物扁を記するは植物よりも甚しく岸の生物地理の南北東西によりて種類を殊にし海魚の如く淡水動物の如く其数之多くして弁明し難き殊ニ先学者に願て成すのともしき等今予が記述する此扁に預り自ら遺憾に思ふ事甚だ多し。読者は是を□し他日今一層増補詳記するの日を待って可否の論を賜らん事を希ひ併て新奇之動物にして効用あるものを得らるるの人は憚なく告知論あらん事を願上申処なり
- 一 人類食物之多き事挙す可からず、植物の様子動物之如き其調理の如何によりて殆ど是食用にならざる物なし此の扁独り其主用之品を記するの他は略して載せず
- 一 ④植物動物鉦類等にて其形状を詳説するも及ばざる処ハ図画を以て詳明にせん事を欲も限り有る紙数敢て珍奇にして世の人は是を知る者希なる品々に於て初て図説したるものなり、著扁者甚だ遺憾と

する処なり。

- 一 ⑤ 虫類六脚虫属の如く普其数を詳明する益々多く、殆ど究極しつる処を識らず、主要の品を記し他は全ク略せり、名和靖君の説に日本産の昆虫四五万種ならんと云ふ、可驚之大数にて其説を詳記する所存理由は読者の知る処ならん

#### 居家必用日本本草 第一首巻 提要目録

本文は残っておらず、序文、凡例に相当する上記の文章が残るだけだが、非常に情報量が多い。一つ書きされたものが10条あるが、その中から四つを抽出して特徴を指摘する。

下線①からは、植物だけではなく「動物鉱物及製造食品」まで効用を記載しようとする点は、「居家必用」と同様に、人々の日常生活に不可欠な物を網羅する実用性を強調する点で『日本農産植物誌』を拡大した進化形と推定される。

下線②では、植物の分類方法は植物学者から学んだ分類に従うが、実用的な部分である「効用用材観美玩用」などは併記するようにしたという点に、近代植物学の優点を採り入れつつ実用的な面を重視する特徴的な資料と見る。

下線③に見える「北は北海道千島、南ハ台湾諸島の諸品」の言葉に注目する。自力では一つも漏らさず詳述はできないとしつつも、これに興味を持っていたことは十分に伝わる。後に『大日本本草』の記述では北海道の植生を調べ、アイヌ語の方言まで採録していること、沖縄や台湾の植生を現地を照会して収載しようとする態度につながるものと考えられる。

下線④は絵図の重要性を述べた点に注目する。一般への啓蒙書であれば、図示することの重要性は十分に理解できる。ここに書かれた「珍奇にして世の人は是を知る者希なる品々に於て初て図説したるものなり。著扁者甚だ遺憾とする処なり」という考えがあって、『大日本本草』では多くの彩色画を描いて挿絵にしていること関連するだろう。

植物図譜での絵図の在り方に関して、こことは直接関係しないが、別の資料で西涯の考え方が表れている部分があった。『普通植物図譜』に対する意見文（B-1⑫）を見ると、西涯が『普通植物図譜』（東京博物学研究会著、明治36年～41年）に対して以下のような書簡で送っていたことがわかる<sup>(22)</sup>。

（略）願候先年ヨリ御尊会（註：東京博物学研究会）ニ於テ引続御出版相成申候「普通植物図譜」義、誠ニ以テ美挙斯学ノ為ニ有益ナルコト申込モ無御座候、敢テ如斯事ヲ申上ルハ甚欠礼ニ御座候共、図画ノ種類其科ノモノナレバ其何族ナルヲ御選無御座候。双図ヲ一葉ニ載セラレ申候ハ今日進捗ノ学□於テ後此此図ニ依テ実物調査ノ際大イニ遺憾と相存候。就モ出版上或ハ種々ノ事情ハ有之申候事哉と奉存候共是ハ□後編ニ於テ御改有之候ては如何（略）

ここでは、分類上同じ科で違う属（族）の植物の絵図が2枚同じページに載せられていたことに対して、採集調査を行う際には不都合である旨の異見を述べている。植物採集やその分類に対する西涯の姿勢が分かる。続けて「就モ出版上或ハ種々ノ事情ハ有之申候事哉と奉存候共」というのは、植物図を描きながら『大日本本草』を編纂する西涯の感想としては面白い。

下線⑤では、昆虫類も日常生活に不可欠の知識としてここに加える本草学的な視点が色濃く表れている点に注目する。実際に植物以外の動物類、鉱物類などに及ぶ博物的な興味がどの程度のものだったのか触れていないが、ここでは「主要の品を記し他は全ク略せり」としている。

以上の点から、ここに挙げた『日本農産植物誌』、『居家必用日本本草』は西涯の実学重視の立場を示すとともに、『大日本本草』編纂の方針や内容に大きく影響しているものであったと考える。

### 4-3 『大日本本草』が作られる過程

『大日本本草』がそれ以外の、以前に編もうとしていた類編書と大きく違うのは、植物以外の品目を収載していることである。

本文欄外で散発的にメモ書きした部分に見える日付が概ね明治41～42年であることと、全体の分量、収載された品目の多さを見れば、『大日本本草』が西涯のそれまでの研究を集大成するものだったと考えてよいだろう。その上で、調査すべき点が二つある。一つは、植物について内容的にそれまでの物とどのような違いがあるのかということ。もう一つは、植物以外の品目を収載した理由である。

そこで、西涯の著作に通底する基本的な姿勢と、実務的な編纂の進め方を考察する。

#### 4-3-1 序文、緒言から分かること

「大日本本草木類編 卷之壹」では巻頭に序と緒言（B-1⑦）が載せられており、これが最も如実に表れた編集の方針であろう。日付は明治39年6月とあるので、この前後に『大日本本草』の骨子を決めたものと推定される。まず全文を引用し、以下に分析を加える。

大日本本草木編序

近世學術の進歩、博物學に於ける其區域益々拡大し、大いに之が一部に属する植物學は年を追ふて其種族の数を加へ、之を詳明に記載すること實に容易の業ならず。目今日本に行るる植物記載の書籍は皆一部分を載せしものにして、日本國に於て産し又は外國より移植せし植物の、所謂戶籍簿なるもの未だ一部も之を見ることを得ず、實に遺憾に堪へざるなり、余若年の頃より斯學を愛し久しく諸家の著書を考究し、また實物に於て之採集調査せしも数千種の多き、一人のちから之を全くすること固より能わざるところなり、然るに我身と學と同行せず、身は年を経て老境に及び、斯學は年を追ふて其品数と其學說を新たにし、加ふるに我新領土の南北に於て拡大せし為、兩帶の産植物を増補せざる可からざる幸を得たるも、もはや今日に至りては獨力にて此の広き南北數千里に亘る土地に産する植物を網羅、殘るなく詳明に記載せんとするは及び難き事情にて止るにしかずと思ひしも、また世に於て斯の如き人世一日の欠く可からざる有用なるものの發行する人なきを遺憾とし、自ら其學力の微なるを顧みず世の為と信じて是を編述せしなり。誤謬の多きと品数の不備なるは讀者之を補ひ之を刪正せんことを希望（す脱）せんとす。

明治三十九年六月 谷村西涯誌

緒言

- ①此書、日本列島四國九州北海道琉球台灣樺太等、我大日本領有地ノ植物ヲ分類記載し、專ラ其応用效能を詳説セントスルニアリ
- ②此書ハ諸家ノ日本植物書中ニ記載ノ品、及大學植物園ニ栽植シアル新輸入外國産ノ植物ニテモ既ニ本邦ヘ移植セシモノハ挙テ皆ナ之ヲ補ハンコトヲ願フ
- ③此書ニ載ス所ハ、第一ニ木本植物ノ部トシ第二草本植物ノ部第三隱花植物ノ部第四海産植物第五苔癭植物トシ、以下之ヲ略シテ載セス、之レ多クハ無益ノモノナレバナリ
- ④此書ハ學者ノ為ニ編述セシモノニアラズ、Ⓐ居家必用ノ為ニ著セシモノナレバ平易ニシテ明了ナランコトヲ欲ス故ニ文辭ハ只ダニ功近ノ語ヲ用ヘンコトヲ主トセリ。  
植物學植上ニ於テ一定ノ用語アリ。是レハ素ト斯ノ學語ヲ少シク解スル人ニアラザレバ明了ナラザル遺憾アレドモ止ヲ得ズ此ノ學語ヲ用ユル所アル  
Ⓑ植物學ノ要ハ植物其物ヲ人世ノ用ト為シ、則利用厚世ヲ主トシ徒ラニ珍奇ヲ探求スルノ意ニアラズ。故ニ其応用ノ部ニ古昔有用ニシテ目今既ニ不用ニ属セシ染料用ノモノ、漢藥ノ如ク全然廢物ニ歸セシ觀アルモ、Ⓒ或ハ又此中ニ於テ如何ナル用途ヲ發明スルヤ、予メ期ス可カラザルモノアリ、為ニ之ヲ

棄テズ其ノ応用ヲ載ス

東京理科大学ニ於テ編纂中ノ大日本植物誌ハ、実ニ有益ニシテ完備ナルモノナレドモ其全部発行ノ期ハ此後幾十年ニシテ結了スルモノナルヤ前途遼遠ナルモノナリ、或ハ全部完成ノ暁ニ至ルモ、中等以下ノ人家ニテ是ヲ購テ備フルコト能ハズ。況ヤ下流一般社会ニ於ルヲヤ

⑤此書ハ居家日用ノ為ナレバ、精細ナル図ヲ挿入シテ読者ヲシテ一日其概略ヲ見ルコトヲ得サセ(シ脱カ)ムレバ大イニナルコトヲ識ルモ其費用容易ナラズ。今之ヲ略シ僅ニ数百ノ縮図ヲ載スルノミ(以下欠)

序は編纂の動機を示している部分だが、これによって『大日本本草』は当初は植物書とし編纂しようとしていたのだと分かる。ここではその熱意を三つ指摘できる。

一つは、新種の発見や外来種の輸入で国内に存在する植物の品種は増えている現状に対し、それら全てを総覧する植物書を作りたいとする思い。そして、若年より久しく植物学を愛し読書や植物採集を通して攻究してきた(知識の蓄積がある)ことを集大成する意気込み。そして最後に、日本が領土の拡大によって従来以上に多種の植物種を保持する国になったことに鑑み、これを機にこれまで編集してきた植物書を増補して内容を拡大して総括したいという思いである。特に最後は国政や政治的な関心も高かった西涯にとって、日本が日清・日露戦争の勝利によって台湾や樺太へ領土が拡大した強国になったことへの時代の高揚感も感じられる。つまりこの書名が、単に類編書『日本本草』の増補を意図する「大」ではなく、「大日本」の本草書の意を含ませるものだったのではないかと察する。序に語るの目標というよりも、この目的が完成するまでは『大日本本草』は完成しない、という覚悟とも感じられる部分である。

それに続く緒言は、凡例に当たる内容である。『日本農産植物誌』や『居家必用日本本草』の凡例にある内容を継承しているように思われる。緒言には「此書～」で書始める五つの内容があるので番号を振ってそれぞれ個別に分析する。

①、②、③は植物書としての編纂を前提としており、特に②では、植物以外の天産物について「以下之ヲ略シテ載セス、之レ多クハ無益ノモノナレバナリ」としているの、動物類等の収載は当初無益とさえ考えていたが、編纂を始めた後に何らかの方針の転換によって増補を意図して加えられたものと見てよいだろう。

①では、記載する植物は「日本列島四国九州北海道琉球台湾樺太等、我大日本領有地」を対象としていることを示す。「我新領土の南北に於て拡大せし為、両帯の産植物を増補せざる可からざる幸を得たる」とあるのと併せて、意識上「大日本国の領地」を対象にした『大日本本草』と見るのが妥当だろう。そして記載内容が、主に「応用効能」を詳説するとある点には、実用を重視する意識が鮮明に表れている。

②では、本書が従来の植物書(図説などか)が記載する内容を超える目標が感じられる。増えつつある海外産植物への関心の高さが見て取れる。

③の植物の記述には、木本、草本、隠花(ここでは菌類か)、海産物(海藻類)苔類の順序を付けている。理由はないが、これが西涯の考える有用性の順かもしれない。また、ここまでを有益な「植物類」と認識していたようである。

④では「居家必用」のために本書を編む意図を鮮明にしている。もちろんこれは、『大日本本草』が『居家必用日本本草』の延長線上にあることを宣言したものである。具体的には、「居家必用」なので平易に書くことを心がける(下線A)、植物学は人の役に立てる「利用厚生」のためとする。正に本草学が持つ実学としての価値を述べている(下線B)部分である。旧記にある「応用」の記載は切り捨てず、今後の価値にゆだねる(下線C)としている点は『日本農産植物誌』の凡例に近い。

⑤からは『居家必用日本本草』以上に精緻な絵図の必要性を意識していたことが分かる。

以上から見えるのは、明治39年(1906)時点で構想した『大日本本草』の内容は、『日本農産植物誌』や『居家必用日本本草』、『日本本草』の内容を増補した、一般大衆に向けた実用性が高いものだったことである。現存する『大日本本草』の内容は、通覧した限り確かに農作物では多くの品種が収載され「応用」や「培養」

に係る部分は充実し、全般に「雑記」とした関連知識を付記して充実を図ったものである。それだけではなく、序や緒言では言及していない動物類や加工品、古物の収載、高山植物の詳細な変種、亜種を収載していることも特徴である。

次に『大日本本草』以前に作られた類編書の本文に相当する部分が全く残っていないことにも疑問が残る。明確な理由の記載がないので残された成果物から推定せざるを得ないが、結論から言うと、それらは『大日本本草』の編纂のために意図的に解体していたのではないかと考える。仮説として、前後関係は不詳だが、そうやって『日本農産植物誌』や『居家必用日本本草』として書かれていた草稿を利用し、それをもとにまず再編集されたのが、現在表紙のみ残されている『日本本草』であり、更にそれを解体して作られたのが『大日本本草』だったのではないかと見る（図1参照）。

前述「2-1 表記の揺れ」の項で指摘したように、『大日本本草』では属の表記には「○属」と「○族」とするものが混在している。そのような差異が生じているのは、類編書であった『居家必用日本本草』と『日本本草』の間で既に表記の違いがあったか、『日本本草』の編集時あるいは最終的に『大日本本草』が作られた際に表記を変えたためではないかと推定される。

この仮説を前提にするならば、『大日本本草』は既存の類編書にあった内容を引き継ぎ、絵図を書き加えたり、部分的な加筆原稿を追加したりして内容を整えた植物に関する基部と、それに動物類や鳥類、魚類などの新たな収載品の内容部分を加筆した部分を合体させたものだったと考えられる。

その結果、『大日本本草』では農産物に関する記述が詳細なのは、既に複数の類編書にあった詳細な情報を再利用できたこと。また類編書には収載が少なかったと思われる植物類（恐らく多種の高山植物など）には、西涯が必要性を意識した図について、比較的多く彩色画が残っていること。『大日本本草』のため特別に活版印刷で準備した専用箋への記載（写真2）は、植物の収載品目を選択的に加筆する際にだけ用いられたためか、あまり使用されず、結果として現存する枚数が非常に少ないこと。そして植物類以外の動物類などでは参考にする資料の情報が少なかったためか「応用」や「雑説」の記載例が植物に比べて非常に少ない、といった客観的な特徴もまた説明ができるのではないかと考える。

#### 4-3-2 具体的な情報の収集

『大日本本草』の編纂では、知識や関心の広がりによって途中からでも内容が膨らんでいった部分のあった可能性がある。具体的には高山植物類や動物類など、植物以外の加筆部分である。特に後者は西涯にとっても専門外のことだったと思うが、植物学を超えた本草書の要素の色濃い教養啓蒙書の作成を決心した重要な要素だったと思われる。

本項では、そのような関心の広がりによって独自に情報を集めていた過程を具体的に考察する。

##### (1) 登山、高山植物への関心

『大日本本草』を通覧し、収載する植物をリスト化してみると、高山植物の分量の多さが目に付く。南砺地方福光附近の山はもちろん、立山山域でも登山し植物採集を行っていたことがわかる。しかも丈の高さ、花の色、葉の大きさなどの変種が多数収載され、高山植物への興味の深さが改めて感じられる。

西涯は元来植物好きで、植物学や本草学の本を読み独学で知識や教養を蓄えていた。しかも近くに情報交換できる教養人、蔵書家同士（石崎家、松村家）がおり、特に光瑤、松村清治とともに日本山岳会の会員となる登山や高山植物の愛好者でもあった<sup>(23)</sup>。この交友の中からも関連する雑誌や団体の情報を得て、白山や医王山などの自然に触れ、趣味で博物雑誌や植物学、山書にも親しんでいったものと思われる。

西涯は明治40年（1907）頃から高山植物の美しさに魅せられたということ<sup>(24)</sup>だが、恐らくもっと若い時から登山を愛好していたようである。特に登山を通して関わりが深かった光瑤との関係では、高山植物の採集に加えて写生画の作成についても何らの形で関わりがあったかもしれない。

前述のように文献から情報を抄出する独学が基本であったから、山岳関係では創刊されて間もない日本山岳会の雑誌『山岳』や新聞、県外の博物学同好会などから情報を集めて抜き書きした資料を作っていたようである。もちろん文献だけではなく、自ら植物を採集し実際に植物を研究する実践的で合理的な精神を持っていてことも大きいであろう

西涯と登山、高山植物との関わりを示す資料に「高山植物に関する照会文（書簡下書き）・（部分）」（B-1 ⑭）がある。この中では雑誌『山岳』に掲載された高山探検に関する記事を読み、その筆者の高山跋涉や植物学の知識への賛辞を述べている。これはその筆者に宛てた書簡下書きの一部（冒頭部）と見られ、西涯と登山、植物採集に関する興味深い内容がある。

未得貴尊意候へ共一筆奉拝呈仕候（中略）陳者先年ヨリ雑誌山岳の上ニテ、我隣境飛信ノ高山探検之記事数度奉拝見候。貴君ノ日本高山跋涉及植物学ニ於テ御熱心之程不堪憾、佩拝尊顔斯界之御高話拝聴奉申上度存居申候共拙老其機ヲ得ズ不堪遺憾、拙老者多病ニシテ殊ニ接近ノ山地ニシテ登攀ヲ試ルコトヲ得ズ、常ニ意中頻々高山ヲ跋涉スル快ヲ思、今更 老体如何トモ不能及事（存脱か）居申共今年八月孫兒ヲ青年画家石崎光瑤氏ト同伴、立山ノ雄山浄土山別山ノ三岳ヲ跋涉 致サセ申、高山植物採集ヲ致サセ申候共未タ少年ノ事、纔ニ四五十品斗得申候。拙老者今ヨリ三十数年前ニ於テ立山ヘ登リ其際採集致申標本有、東京ノ諸名家ニテ設立相成居申博物会と云フ様ナル温古会ト申候集会ヘモ持出申候。此時ハ彼有名ナル栗本鋤雲先生ノ手ヲ経テ出品致申候処、予カ採集品ノ中ニテ目下名称ノアルモノニテ其際ハ未タ名称得申品モ有之申、右会ニ於テ珍品と評（セ脱か）ラレ申程ニテ然共総テ高山植物ノ事ニ於テ有甚ダ（以下欠）

宛名は書かれていないが、恐らく同時期に白馬岳、槍ヶ岳、燕岳はじめ日本アルプス縦走の記事を『山岳』に発表している志村烏嶺宛だったのではないかと推定する。

文中、多病老齢でこの頃にはもう登山は難しく、それを残念に思うとしながらも高山植物への関心は軒昂であったことが読み取れる。

また「今年八月孫兒ヲ青年画家石崎光瑤氏ト同伴、立山ノ雄山浄土山別山ノ三岳ヲ跋涉致サセ申、高山植物採集ヲ致サセ申候共未タ少年ノ事、纔ニ四五十品斗得申候」からは、光瑤との登山を通じた深い関係が見える。光瑤は明治40～42年（1909）頃は夏に立山へ登って立山温泉に滞在し植物採集をしていたが、孫を光瑤と共に立山に登らせ植物採集をさせている事実は興味深い。『植物採集記』（B-1 ⑯）には「立山採集 谷村<sup>(ママ)</sup>順造 明治四十一年八月一日発立／八月三日登山六日帰宅」の一文があり、採集した植物名38種を列挙する<sup>(25)</sup>。因みにこの年、西涯は60歳、光瑤は24歳、順蔵は16歳になる。

「拙老者今ヨリ三十数年前ニ於テ立山ヘ登リ其際採集致申標本有」と書いているように、高山植物への愛好はかなり早くから持っていたようである。もちろんその多くは腊葉にして写生したと思われるが、『腊葉帖』に貼付された中に立山で採集したと記載がある腊葉は15種ある。採集者と共に挙げてみる。

「つまとりぐさ」（立山）採集者 松村勇／「ふでわた」（立山弥陀ヶ原）採集者 松村勇／「記載なし」（立山）採集者 松村勇／「りんねさう」（立山）採集者 松村勇／「がんかうらん」（立山）／「うらしろたて」（立山）／「いわうめ」（立山別山）／「こまくさ」（立山）採集者 石崎光瑤／「みやまからまつさ」（立山）採集者 石崎光瑤／「つまとりぐさ」（立山）採集者 松村勇／「ふでわた（立山弥陀ヶ原）採集者 松村勇／「りんねさう」（立山）採集者 松村勇／「しらねあふひ」（立山）採集者 石崎光瑤／「こまくさ」（立山）採集者 石崎光瑤／「みやまからまつさ」（立山）採集者 石崎光瑤

ここで採集者に名前が挙がっている光瑤、松村勇の他、『腊葉帖』にある「けだいもんしさう」<sup>(26)</sup>を白山で採集した河合良成とは、それぞれ進む道は異なるが登山や植物への興味を通じて親交があった<sup>(27)</sup>。

## （2）高山植物への関心、登山や植物採集 山岳関連雑誌の抄出

自ら植物を採集するのは別に、雑誌や新聞に掲載された県内外の高山植物や登山に関する記事を抄出して情報メモや各地の高山植物のリストをたくさん残している。

「雑誌に掲載の登山、高山植物関連のメモ」（B-1 ⑮）や「植物採集記」（B-1 ⑯）に記載が残る。まず、出典が分かるものを挙げる。時期的にはやはり明治41年前後が多いようである。

- ・吉澤庄作「大蓮華山跋涉録」（『富山日報』明治41年7月24日～12回連載）
- ・吉澤庄作「越中方面 大蓮華山登攀録」『山岳』第五年第一号（日本山岳会、1910）
- ・志村烏嶺「奥の富士（岩手山登攀記）」『山岳』第三年第一号（日本山岳会、1908）
- ・塩崎一郎「八ヶ嶽登山」（高岡新報）
- ・志村烏嶺「日本アルプス縦走記」『山岳』第三年第二号（日本山岳会、1909）
- ・大平晟「北陸三山跋涉感」『山岳』第二年第一号（日本山岳会、1908）
- ・長島文翼「大蓮華山登山記」（『富山日報』明治42年8月7日～9月18日31回連載）
- ・安田篤「恐山尻屋岬植物採集紀行」（『植物学雑誌』第二百三号、日本植物学会、明治37）
- ・「高山植物ノ事ヲ記セシ書類」と題を付けて雑誌『博物之友』に記載する全国の山岳とそれが掲載される雑誌の巻数
- ・伊達九郎 高松誠「白峯北岳登攀記」（『山岳』第二年一号、日本山岳会、1907）p26～41

特に、吉澤庄作の報告にある立山の植生については、採集場所（芦峯寺村ヨリ藤橋黄金坂草生い坂辺山麓ニテ／材木坂美女坂／山毛樺坂／弥陀ヶ原迄ノ間／弥陀ヶ原ヨリ碁石坂鏡岩迄の間／室堂ヨリ二ノ越近傍迄）毎に詳細に書き写したものが残っている。西涯の関心の高さや、明治中期の立山の植物相の分かる記録として重要である。

### （3）新領土樺太や南方の植物への関心

西涯は昔から友人の影響も受けて地理が好きだったこともあり、日本や中国大陸の産物や地理を調べて抄録を作っていたという<sup>(28)</sup>。そんな経緯があつてか、身近な地域だけではなく遙かに遠い地域も含めて興味を持っていたことが分かる。特徴と言える北方や南方の植物への関心とその具体的な実態をまとめておく。

#### ・樺太方面

別名の欄には北海道方言やアイヌ語の名称を挙げているものがあつた。一例を示すと、「くまのみづき」の別名に「ウトニカ（アイヌ語）」、「とどまつ」の別名に「ひっぷ（アイヌ語）」の記載がある。また、「カツラ（桂）」について説明を書いた用箋は2種類あり、一方では別名を「カモカツラ」、「カツラキ」としているのに対して、もう一方では「タマカツラ カツラギ ランゴ（アイヌ語）」を挙げている。この2枚をもとにした清書では「カツラ雌本并実」と題した彩色図と共に集約し、そこでの名称は「乎加豆良 和名抄 カモカツラ カツラキ タマカツラ 下野 アカキ ランコ 北海道」としている。増補の意味で『大日本本草』の編纂の際にアイヌ語を後から書き加えたと見られる。参考にした書籍の中には『北海道森林植物図説』もあることから、ここからも情報を得ていた可能性がある。

#### ・台湾・沖縄

台湾は日清戦争による新領土で、ある意味で日本の勝利を象徴的に示す特別な意味を持っていたとも思われる。珍しい高山植物への関心が高い西涯にとっては地理的な興味と共に、日頃は目にしない未知の南方植物への憧れが強かったのではないかと思う。

これも植物図譜などから情報を得ていたと思われるが、B-1 群資料には南方の植物について直接現地の関係者への書簡を準備していたことが分かる資料がある。

西涯は明治39年8月に台湾総督府殖産局恒春熱帯植物殖育場の田代安定<sup>(29)</sup>に宛てて情報の提供を求める書簡を書いていたようで、その下書きが残っている。

謹啓 益御精勤為国家奉大賀候（中略）拙者義明治初年ヨリ起稿致申候日本植物書、漸々脱稿ノ際ニ有申ヨリ近年南北ニ於テ新領有之地産出ノ植物類甚ダ多ク之ヲ詳細ニ調査仕候ハ実ニ容易ノ事ニテ無御座、右著書ハ既ニ成功ノ場合ニ到リテ完備ノ編集ヲ為スコト不能謹遺憾ニ不堪、乍去身ハ老境ニ達シ海ヲ越テ御地市へ採集実査ノ為ニ出申候気力無御座絶望致居申候処、迂遠ニモ近日ニ至リテ斯ク有用ナリ

熱帯植物殖育場ノ先年ヨリ設立有之申候事ヲ承り申ニ付、目下場中ニ栽培ノ草木目録一冊言頒与ニ預リ申度奉懇願候（中略）

明治三十九年八月三日／台湾総督府殖産局／恒春熱帯植物殖育場／田代安定殿

「明治初年ヨリ起稿致申候日本植物書、漸々脱稿ノ際ニ有申ヨリ近年南北ニ於テ新領有之地産出ノ植物類甚ダ多ク之ヲ詳細ニ調査仕候ハ実ニ容易ノ事ニテ無御座」とある。まずここに書かれた「日本植物書」（下線部）が何を指しているのかが疑問になる。同書が明治初年から起稿されていたという点、また明治39年時点で脱稿間近である点、新領土産の植物について情報が欲しかったという点を総合すると、まず文中の「日本本草書」とは、西涯がそれまで著そうとした類編書全体を指し「明治初年」はその中で最も早く書かれたものの起稿時期を示すものと解釈が可能であろう。そして「漸々脱稿ノ際ニ有」とは、『大日本本草』の脱稿を指すと考えることができる。つまり、明治39年頃から明治42年頃を中心に『日本本草』として編纂していたものを一旦解体してその増補として『大日本本草』を編纂する際、台湾の植生に関心を持って情報を集めたものと見られる。西涯はこの時点で58歳だったことから、「老境ニ達シ」というのもあながち謙遜ではないだろう。それでも『大日本本草』の内容の充実を図るために手を尽くそうとする点に、西涯の探求心や情熱の発露を見る。但しこれに対する田代からの返信は残っていない。それは単に返信が保存されていないためとも言えるが、そもそもこの書簡が実際に田代に送られたのかも事実としては不明である。

また、これとは別に「八重山島司黒川作助宛書簡下書」（B-⑰）が残る。これを見ると西涯は沖縄県八重山へ、台湾の田代とほぼ同様の依頼をしていたことが分かる。

啓閣下益御清勤不斜為国家奉大賀候、陳者近頃誠ニ突然御繁務中へ奉恐入候義ニ御座候共、拙者明治初年ヨリ起稿仕候、日本植物書三十数年の久しを経て近日大略編纂完全ニ及申候ニ付板天下同好之諸子へ頒ち度場合ニ立到申候度、御地方及台湾ニ産出ノ植物ヲ詳ニ調査仕事難及、最も植物全体ニテ無御座普通ノ所ニテ宜敷御座候共、実ニ遺憾ニ不堪御地方へ出張採集調査致申度素志は固よりニ御座候共、歲月身と共にセズ既ニ老年ニ及ヲ航シ山河ヲ跋涉仕候事難及申存ニ付失敬ノ次第ニテ恐縮致申候共、御所轄群島ニ於テ産出ノ植物中ニ於テ普通ノ草木類、御所轄産掛又ハ農工掛ニ於テ御調査相成各島産出ノ植物目録或ハ其形状ヲ略記仕候書類、御役所ニ御備へ冊子有合無御座候哉。奉伺上候有合申候ハハ謄写仕候事御許容ニ預リ申度以上御願上申候（中略）右は自己一人之為ニテ無御座候広ク斯道学者之為ニテ国家ノ公益ヲ計り申度者ニ付不悪宜敷奉上候謹言ニ付□□御返信之程伏而奉願上候以上（中略）

沖縄県 八重山郡大浜間切登野城村／黒川作助 殿

「拙者明治初年ヨリ起稿仕候。日本植物書三十数年の久しを経て近日大略編纂完全ニ及申候ニ付板天下同好之諸子へ頒ち度場合ニ立到申候度」（下線部）とあるように、ここでも「日本植物書」の編纂が述べられている。ただ田代宛では「漸く脱稿」としていたのに対してここでは「近日完成に及ぶ」としているの、この書簡の方が後と言うことになる。書簡が書かれた時点が明治初年の起稿から30年後とすると、逆算すれば植物に関心を持ち出したのは明治10年前後、西涯が30代半ばで福光小学校の建設に尽力していた頃である。そして、『大日本本草』は出版する希望を持っていたこともここから分かる。

手紙が出された年月日は分からないが、黒川作助は明治36年9月から明治39年1月まで八重山島司の任に就いているので、書かれたのはこの間ということになる。

この内容に対する返信と思われる書簡が西涯宛に届いている。但し、黒川作助からではなく宮古島司橋口軍六<sup>(30)</sup>からの返信であった。『大日本本草』の編纂を始めて南方植物に関する情報が必要になったのは、実際に早くとも明治39年前後と推定されるので、黒川宛てに書翰を下書きしつつも、清書して実際には橋口に送られていた可能性もある。

宮古島司橋口軍六から明治41年1月11日付で西涯に届いた返信「宮古島司橋口軍六からの返信」（B-1⑱）が残る。

拝復

今般日本植物書御編纂ノ趣キヲ以テ、当所轄内ニ産出スル植物類ノ名称形状効用等御承知致度キ旨御申越相成候処、㊦不幸当島庁ニ於テハ右ニ関シ抛ルヘキ調査書類ノ備付無之（中略）㊧折角ノ御依頼本意ニハ無之共モ止ムヲ得ス、全然御高需ニ応シサルモ如何ト存シ、ホンノ少部分ニシテ粗笨ノ調査ニハ候ヘ共、氣付シモノノミ別紙ノ通り調査セシメ及御送付候条御落手相成候ハハ本懐之至リに御座候

明治四十年一月十一日

宮古島司橋口軍六（職印）

谷村友吉殿

付記 名称ノ処ノ用字ハ当地ニテ普通使用スル字ヲ用キタレバ学語ニアラズ、其右方ノ片仮名ハ土語ナリ、尚上記ノモノハ僅カニ一部分ノモノヲ記セシノミモノニテ当地産ハ勿論内地地方ニ産スル種類モ其数多数アルモノト知ラレタシ

※別紙に罫紙2枚が添付されている。

残念ながら「不幸当島庁ニ於テハ右ニ関シ抛ルヘキ調査書類ノ備付無之」（下線部㊦）とある。しかし、それに続けて「折角ノ御依頼本意ニハ無之共モ止ムヲ得ス全然御高需ニ応シサルモ如何ト存シ、ホンノ少部分ニシテ粗笨ノ調査ニハ候ヘ共氣付シモノノミ別紙ノ通り調査セシメ及御送付候条御落手相成候ハハ本懐之至リに御座候」（下線部㊧）と添えてあるのがせめてもの対応であった。

この書簡には罫紙2枚の別紙が添付されており、そこには植物の「名称」と「形状効用」を項立てし、本土には見られない南方の植物20種については簡潔な説明を添え、内地にも産するものとして名称のみ記した植物12種が記載されている。

『大日本本草』では、三種の植物で説明にこの返信の情報を利用した跡が見られる。

#### ①「福樹」

返信別紙「福樹（プクス）喬木闊葉樹ニシテ用途前種ニ同シ（註：「用材に供し薪炭、木灰に使用す」の意）  
実ハ円形ニシテ別ニ用途ナシ」

『大日本本草』では「もくれいし」の品名に「一名やくぼく、ぷくず（宮古島）、福木（琉球）」、応用の項には、琉球群島では主として用材とし、薪炭木灰を作る材料とする。家も回りに多く植え防風にすることが書かれ、欄外には「明治40年1月、宮古嶋司橋口軍六氏からの情報による」旨が書き添えられている。

#### ②「梯梧」

返信別紙「梯梧（デーグ、或ハドフキ）喬木闊葉樹ニシテ板材指物材ニ使用スルノ外余り用途ナキカ如シ  
花（赤色）観賞用トシテ詩人墨客ニ珍重セラル」

これに対しては、「でいご（梯姑）」の別名に「一名でーぐ、どふき」とあり、応用の項には、用材は製板や指物の用途にする。観賞用に栽培することが書かれている。ここでは、これが橋口からの情報に基づくとする書き添えはない。

#### ③「久場樹」

返信別紙「久場樹（クバノキ）喬木ニシテ葉ハ掌状ヲナシ採リテ久場団扇、ツルベ制作ニ使用スルモ茎ハ別ニ用途ナシ」

これに対しては「コパ」（ビロウ）に「一名くばのき」とあり、応用の項には、この葉を「コパ団扇」を作るのに用いることが書かれている。欄外には「宮古島司橋口軍六君の報」と書き添えている。

#### （4）福光近郊での植物採集や旅行中の観察

明治40～41年にかけて、福光近郊の山野で盛んに植物採集を行った記録が残る。老境に入り高山の登山や遠方の植物採集が見られない分、福光近郊での採集は盛んに行っていたようである。『植物採集記』（B-1 ⑩）には、下記の採集に出かけた記録の他に「福光町地域天産植物目録」と題した記録も作成している。

- ・明治四十年八月早起荒木村ノ堤上東町ノ橋ヨリ高宮橋ニテ採集記セシモノ（約41種の植物名と科名

を記載)

- ・「明治四十年十月十八日午前十時発 西勝寺村山及和泉山植物採集(42種を列記)
- ・四十年十月三十一日高宮橋ヨリ南西橋詰堤上ヲ経テ河ノ中州及本町川入口下流ニテ採集
- ・四十一年四月二十日福光山
- ・四十一年五月十六日矢水堤荒木町橋ノ南高宮村一本桜ノ南一丁許ノ間に於いて堤上及堤下ニテ採集セシモノ、花ヲ有スルモノ
- ・四十一年六月十二日福野ヨリ井波ノ間道路の傍に自生品
- ・(明治41年)六月十四日法林寺山ニ於テ採集
- ・(明治41年)六月二十八日土生新ヨリ立野原ヲ経テ城端停車場
- ・(明治41年)十一月七日法林寺村へ到ル途中路傍及水田中、法林寺山採集

このように採集された標本は『大日本本草』にも記載されており、「なつぐみの一種」、「きくざきいちげさう」、「たうげしば」にはそれぞれ明治41年4月21日に福光山で採集したものであることを付記している。

また京都に住む長男一太郎家族を訪ね、度々関西の名所見物に出かけていたようで、『植物採集記』(B-1 ⑩)には下記の旅行日程の記録がメモされている。植物の情報収集を目的とした旅行ではないが、途中ではやはり植物への関心が高かったようで、目についた各地の植物が『大日本本草』の欄外に書き込まれている。

- ・明治41年2月2日大阪天王寺公園温室内植物
- ・明治45年7月京都
- ・大正3年5月～6月京都なら大阪見物
- ・大正5年4月～5月 伊勢参拝、関西名所見物

これ以外にも関西方面へ出かけた際、名所見学で目にしたり、採集したりした植物について『大日本本草』の欄外に書き込まれている例がある。

- ・「皂莢」明治三十七年八月七日京都府丹波国亀岡保津川ノ傍ニテ採集セシモノナリ
- ・「ムクゲ」明治三十七年八月丹波国亀岡ヨリ舟ニテ保津川ヲ下ル 山溪岩石ノ間木槿多ク生スルアリ 全ク自生ノモノニ似タリ 河上ノ人家栽スルモノノ種ヨリ生ゼシモノナルヤ否詳ナラズ
- ・「グミ」ぐみ樹ノ大木山城宇治神社ノ前宇治川ノ岸ニ高サ十尺余圍一尺余ノモノアリノ明治四十一年十一月三十日現ニ之ヲ見タリ
- ・「やまあゐ」明治四十一年十一月三十日山城国男山八幡社ノ西南部ノ山へ入り樹陰ノ知多くやまあゐノ生スルヲ見ル葉脈既ニ花ヲ着ルモノ多シ

#### 4-3-3 編纂の具体的作業

『大日本本草』は、類編書や『日本本草』を再編集し新たな彩色絵図を含む加筆原稿を合体させた構造という仮定で分析を進めてきた。現存の資料仔細に分析した結果、編纂作業は以下のような形で進められたのではないかと推定される。

それまでに書き溜めていた類編書を一旦解体し、利用できる内容を選んで再編集用に保存。『大日本本草』の内容を特徴付ける「応用」や「培養」「品類」などは、農産物や園芸植物のものを中心に大部分を利用したのではないと思われる。「本資料」の中には、一つの植物について複数のやや異なった内容が書かれた用箋と絵図を虫ピンで留めてセットにした保存の形式が多数見られたがこれは、最終的な清書原稿となる前段階の仮整理だったものと見られる。そこで類編書から利用した原稿と、必要があれば新たに作った別稿や絵図を虫ピンで留めて一単位としながら、予定の植物分類に従って揃えることで草稿をまとめていったものと思われる。

そのような、セットにして綴じられた野紙には虫損も見られるが、セットにした用箋には虫損の箇所が同じではない場合がある。つまり虫損は留めてセットにした後にできたものではなく、もともとは別々に虫損

していた罫紙を後からセットにしたという経緯が分かる。

但し植物以外の収載品目では、そのようなセットは作られていない。新たに文献から抄出するなど様々な情報の収集を行いながら、再編集の途中で加筆された新たな原稿として作られていったためであろう。

西涯は、序の中で『大日本本草』の編纂「編述」という言葉を使っている。上記のような編集の経緯を見ると、それは文字通り内容をつづめて加筆と再編集して述するという意味で、相応しい表現のようである。

木類編から編纂を始め、セットを作りながら清書し、『大日本本草』の表紙を付けて綴じた体裁で暫定的な完成原稿が作られていったと考えられる。但しその後からも読み直し、朱書きで推敲を加えた跡もまた多く残っている。

結局、膨大な分量になっていることや、自身で納得のいく内容の完成度が見通せなかったことなどから未完のままとなり、現在残るものは大部分が編集途中の草稿として束ねられたと見られる。

編纂時期の推定は、草稿の欄外に散見する年月日のある添え書きを参考にした。概ね明治40年前後が多いが、大正初期のものもある。早いものは明治30年代半ば、大正5～6年頃が最後になる。西涯は大正12年に亡くなっているため、ほとんど晩年まで書き継がれ、最終的には本人が亡くなったことで未完に終わったことが推定される。

そして、完成していれば出版する希望を持っていたことは前述の通りだが、結局その希望は果たされなかった。ただ、綴じた形の稿本も出版原稿を綴じた物にしては丁寧な体裁になっている。専門書ではなく啓蒙書を目指したのならば、地域の人々に回覧して閲覧に供するなどの方法も可能だったのではないかとも思われた。

## まとめにかえて

『大日本本草』は、実学を意識して作られた啓蒙的博物書である。植物分類体系や個体の構造を分析的に見る近代植物学の科学性と、民用厚生のための実学性を持つことに特徴がある。その内容には近世からの本草学が蓄積してきた知識の影響が色濃い。特に植物以外に動物や魚、貝などの天産物全般に範囲にするだけでなく、餅やまんじゅう、うどん、そうめんなどが含まれていることがある。農作物重視の姿勢から穀類、食糧を第一に考えるのであれば、この選択は理解できる。しかし、「開元通宝」や「筑紫都府楼瓦」までも収載するのは博物的というよりも近世本草学の好古や弄石の範疇であろう。これには、実学的というよりも『大和本草』や『本草綱目啓蒙』に対するオマージュさえ感じられる。

『大日本本草』の編纂が進むその当時は、中央では最高学府として整備が進む東京大学で植物学の研究を進めた。矢田部亮吉や松村任三、三好学、牧野富太郎といった植物学者がその成果を植物図鑑の出版などで公表し、その知識が一般愛好家へと広がりつつあった。三好学は、編纂した『日本高山植物図譜』（牧野富太郎との共著、成美堂、明治40刊）の序に「抑も高山ノ登攀ハ啻ニ精神ヲ壯快ナラシムルノ功アルノミナラズ、傍ラ自然ノ現象及ビ自然物ニ就テ観察スルノ好機会ナレバ、此際珍奇ノ植物ヲ採集シ其名称ヲ知ルガ如キ、亦修学上ノ裨益アルベシ」と識している。同時に近代登山の黎明時にあつて、日本山岳会が発足し雑誌『山岳』が発刊するが、その初期の号には日本各地の深山へ登り、新たな高山植物相を明らかにする登山家や博物学者の記事が多く載せられている。この時代性もまた『大日本本草』の作られる大きな背景であったと考えられる。

筆者は、「本資料」を近代以降の本草学継承事例の視点から更に分析したいと考えるが、それだけではなく本資料の存在は、京都などかつての本草学の中心地ではなく、地方都市での地域文化史的に高いレベルの活動事例として発掘できたことにもう一つ大きな意味があったと考える。「本資料」は西涯のアマチュア植物学者としての面が表れているものだが、それ以外に地元福光の発展のための社会活動や福光町議会、富山県議会の議員を務めており、地域の生活文化の向上にも本資料の作成は関係が深いのではないかと思われるからである。

最後に、今回の調査から指摘できる、「本資料」とその成立に関連する資料的価値について4つの視点からまとめておきたい。

#### 〈視点1〉地域性

福光の持つ伝統的な高い文化性の土壌は、旧家の知識層たちの横のつながりを通して地域意識を高めることでもあった。それに育まれた西涯個人の教養レベルもまた高かったこと分かる資料である。

#### 〈視点2〉人と情報のつながり

本資料を通して見える人と情報のつながりの濃密さも特筆される。背景に垣間見える光瑠や松村家との関係から得られる情報だけでなく、日本山岳会、長野や東京の博物学同好会なども情報交換して関係していたことが窺われる資料である。

#### 〈視点3〉西涯の人的資質

西涯の性格や教養、向学心など、これだけのものを長期に亘り書き継いできた本人の資質によるものが大きいのは言うまでもないことである。当時、地方都市に在って中央で修学せず、独学を重ねつつ情報と人的なつながりを持って地域で活躍していたことは特筆に価するだろう。

#### 〈視点4〉本草学の地域的展開

本資料の教養的バックボーンにあったのは本草学であった。西涯はそれを読書と植物採集（本草学的には採薬）により実地に摂取したことを示す資料である。今後、本草学再興を目指して家塾を守った山本章夫の活動と比較することで、明治期近代化の中での本草学の存在理由を考える重要な事例として掘り下げる意味は大きいだろう。

『大日本本草』の持つ情報量は非常に多く、小論ではその全容を明らかにすることは出来ないが、ひとまず全体像を把握し、分析できたところまでの第一報として報告する。

#### 【謝 辞】

「本資料」ご所蔵の松村壽氏には資料の閲覧と借用をご承引いただき、併せて西涯と谷村家に関する関連情報のご教示などに、格別のご理解ご高配をいただきました。南砺市立福光美術館長片岸昭二氏、学芸員渡邊一美氏からは資料の情報をいただき、閲覧の機会に便宜を図っていただきました。また、日本海植物研究所所長佐藤卓氏からは近世から明治期にかけての日本の植物学黎明期の展開、高山植物の植生などに多数のご教示をいただきました。

ここに皆様のお名前を挙げて、深く感謝申し上げます。

#### 【註】

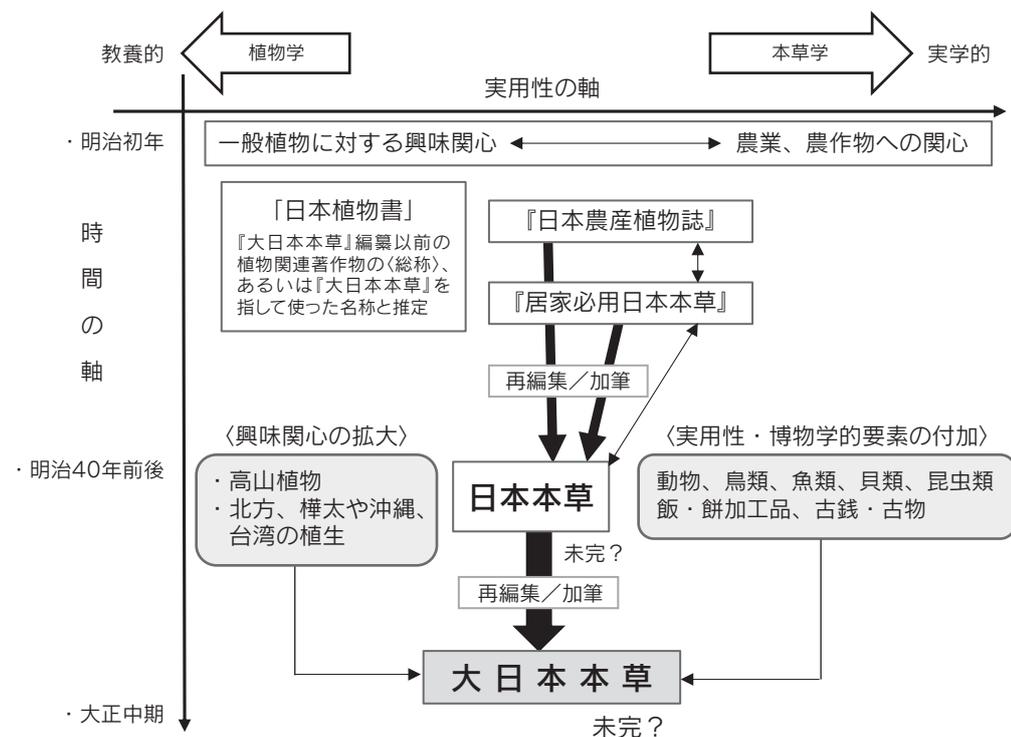
- (1) 幕末に、山本読書室で作られた多数の腊葉標本と小野蘭山の採薬重視の学風については、拙稿「嘉永4年の立山採薬で山本溪山が制作した腊葉について」(富山県[立山博物館]研究紀要第28号、2021)参照。幕末にはシーボルトに直接会って腊葉を贈り情報交換を行う例もあり、腊葉標本の制作を行った名古屋嘗百社に關係する本草学者や、京都の小野蘭山を中心に野外での採薬を重視していたことで、師弟關係を通してフィールドの植物標本作製が広がったと見られる事例が多い。
- (2) 明治政府が西洋医学を採用し医術開業試験の実施、医師免許規則を制定するのに対して、漢方医存続を訴え、東京での山田業広や森立之らによる温知社の結成、名古屋での愛知専門皇漢医学校の設立、京都で賛育学社の創立などの活動が見られた。これらがいずれも江戸時代には本草学展開の中心地でのことだったのは偶然ではないと思われる。
- (3) 「いのち」を写す 石崎光瑠の視点と表現 一写生・下絵・写真一展(平成30年7月7日～7月22日開催)。
- (4) 資料名「谷村友吉『高山植物標本草木類』」の名称は、福光美術館での出展目録による。原資料は4冊あり、表紙にはそれぞれ「高山植物標本」(1冊目)、「高山植物標本」(2冊目)「立山白山白馬山産植物標本」(3冊目)、「立山々彙及白馬山産草本類」(4冊目)とある。
- (5) 西涯の生年は『福光町史』には嘉永七年とあるが、『人事興行録第8版』(昭和3年7月)記載の長男谷村一太郎の項で、父友吉の生年は「嘉永元年二月」とある。また後年、孫の谷村敬介氏によって書かれた『谷村家三代略譜』(私家版、昭和58)でも嘉永元年とあるので、小論はこれに依った。
- (6) 10巻別録2。内容は真偽を混ぜたもので架空の引用文献を載せるなど、出版当時から内容が酷評されている。元周の

業績についても毀誉褒貶が分かれる。ただ、元周は西涯が住んだ福光から近い砺波郡北野村（現南砺市城端）の出身であった。後年も砺波出身の著名な本草家として知られていたため、関連を示すものは残されていないが、『大和本草』を熟読していたのであれば本草学の関連でその存在を知っており、それを超える著作の作者としての認識で、郷土出身でもある元周の業績として評価していた可能性も考えられる。

- (7) 主に漢籍、医学書を収集したのは3代の謙、4代清治が植物書や謡本を、5代和一郎が薬学書、雅楽の本を収蔵したという（松村壽氏のご教示）。
- (8) 同家の松村謙三は晩年の西涯と親しく往来し、その学識を高く評価していたという。その死に対して、日記の中で西涯の初七日（大正12年1月3日）に「（前略）老人（註：西涯）とは余が帰郷以来特に懇意を被り殆ど忘年の交あり日夕往来したるが今や長逝せられて余が親交復一人を欠く真に惜しき事共なり（中略）頗る博覧博記にして特ニ植物の学ニ通じ鬱然たる大家なり 其著書数種あり 老人逝きて郷土更に一服の寂寞を加ふ 嗚呼（後略）」と記している（松村壽氏のご教示）。かつての谷村家の敷地は、現在の北陸銀行福光支店（南砺市福光6788-1）の一部になる。
- (9) 谷村敬介『谷村家三代略譜』（私家版、昭和58）25頁参照。
- (10) B-2群資料に「明治四十二年十月 對嶽園書籍目録并書画古物類」と書かれた、野紙を袋綴にした冊子の文書があり、これが西涯の蔵書目録の一部と見られることによる。また、松村壽氏の記憶に依れば、一太郎氏も後年文筆活動の際に對嶽園の号を使っていたということである。
- (11) 日本メディカルハーブ協会のウェブサイトによれば、櫛の果実はスターアニスに似ており、以前はよく日本でも誤食事故が起きていたという。また戦前にはスターアニスと間違われて輸出されたケースがあり海外で死亡事故などがあったことを紹介している。西涯の記述ではこの点に触れていない点気になる。
- (12) 「応用」では、樹木の用途で適所を細かく分けて詳細に記述しているものが多いが、それらはこのようなメモを参考にしていたようである。例えば、「日本山林第一位樹木 メモ（部分）」（B-1⑩）には、「日本山林ノ第一位ヲ占 樹木ノ一説ニ云フ 第一杉 二赤松 三なら 四ぶな 五もみ 六かし 七黒松八もみぢノ九さくら 十さわらノ又一説ノ泰一ぶな 第四位ニもみぢ 第八さくら 九さわら」とある。また、「植物応用提要」（B-1②）には「草木本良物 応用」の見出しの後に、「繊維ノ部 染料杖 舟材 肥料 木履 澱粉 建築 板材 薬用 工業 橋」とある。いずれも西涯が天産物のどんな用途に注目していたかが分かる資料である。
- (13) 谷村前掲書、21頁参照。干支と「西涯山人写」と落款していたという。
- (14) 谷村前掲書、19頁参照。本資料のB-2群資料の中にはそのような売目録や入礼品のリストが載る。
- (15) 谷村前掲書、20～21頁参照。
- (16) 福光出身の儒学者（寛政7年〈1795〉～慶応3年〈1867〉）。京や大坂で学び、嘉永6年に福光に帰り儒学を講じた。地元で多くの子弟の訓育に務め、地域の漢学の素養を高めた功績は大きい。学恩を受けた松村清治は、その墓碑を建てた（松村壽氏のご教示）。
- (17) 谷村前掲書、102頁参照。この年、西涯は夏休みに福光に帰省した際、元服登山の意味も兼ねて孫の順蔵を立山に登らせた。光瑤はその時立山温泉に滞在しており、光瑤の案内で片山尚一郎、谷村健一郎らとともに立山へ登っている。
- (18) 『福光町史 下巻』（福光町、1971）412～413頁参照。
- (19) 谷村前掲書、7頁参照。当時、福光地区の素封家たちは賀寿の記念には祝いのための費用を節約し社会事業に寄付する習慣があったという。
- (20) 『福光町史 下巻』412～414頁、及び「近代の政治の動向 5 北海道の開拓移民」の項参照。
- (21) 目録は織緯編のものと同じ野紙に書かれており、表紙とは別に他の原稿の中に紛れて見つかった。再編集時に解体し、資料として利用したことが窺われる。
- (22) 「東京博物学研究会」宛の書簡の下書きと思われる。この資料には書かれた日付の記載はないが、引用外の文中には「第二卷第十一輯」を見たものとあるので、これが書かれたのは明治41年4月以降と思われる。西涯は福光に籠もって読書で情報を得ていただけでなく、東京や長野の登山や博物学の研究会や同好会とも情報のやりとりをして情報を求めて関係を持っていたようである。この時、西涯が目にして植物学関連の書籍は、現在松村壽氏が所蔵している。
- (23) 松村清治は、西涯が麻問屋を営んでいた時の番頭で生涯西涯と関係が深い井村勇吉と共に光瑤の勧誘で日本山岳会に入会している。光瑤が日本山岳会に入会したのは、白馬岳で知り合った志村烏嶺の紹介によると思われる（松村壽氏のご教示）。西涯が日本山岳会の雑誌『山岳』に掲載された志村の文章を読み高山植物への関心を高め、それを抄出したメモを作っている背景には光瑤との親交があったからであろう。
- (24) 谷村前掲書、16頁参照。

- (25) ウラシロタテ<sup>(ママ)</sup>/イワイテフ<sup>(ママ)</sup>/タテヤマリンドウ<sup>(ママ)</sup>/ガンカウラン<sup>(ママ)</sup>/アキボボサウ<sup>(ママ)</sup>/タテヤマイハギキヤウ一名イシマギキヤウ/アツツガザクラ/アカツガザクラ/コケモ<sup>(ママ)</sup> /キングルマ 一名ウサキキク/モミヅカラマツ<sup>(ママ)</sup>/イワリンダウ/タウヤクリンダウ/コバノイハカガミ/ヨツバシホガマ/五葉輪生のそほがま未ダ見ザル品/インリイサウ/ムシトリスメレ<sup>(ママ)</sup>/ヤマガラス/ワダサウ/ツマトリサウ/イワチドリ/イハムメ/イハゼキシヤウ/シラ子ニンジン/コガ子バナ 一種小形ナルモノ/タテヤマリンダウの一種/コメツツジ/クモマキンバイ コキンバイの一種最小ナルモノ/モウセンゴケ/ミヤマウシユキサウ/禾本科ノ小草一/一小木本ニテ円形又ハ卵円形ノ光沢アル厚キ葉ヲ有スルモノニシテ幹ハ細ク赤赭色ニシテ赤色ノ毛アリ 花ハ既ニ脱落シ萼片残レリ 有図ノ一槭樹ノ一 葉柄真紅色ナリノ一フウロサウの一種ノ一毛茛科ノモノニシテ二種 各知レス/オホバユキザサ/ハクサンフウロウの38種。同定は西涯が行った物と思われる。また、『腊葉帖』にはこの時採集した物と思われる「唇形科 こがねばなノ一種 花ハ淡紫碧色 四十一年八月三日」と「いわうめ 立山別山頂上近キ處ニテ採集 明治四十一年八月五日」書かれた2つの腊葉が現存する。
- (26) ダイモンジソウ (佐藤卓氏の同定による)。
- (27) 松村勇は画家志望で登山を通して光瑠や河合良成とも親交があった。河合良成は、父藤吉が光瑠の父和善が伏木で営む石崎回漕店の支配人だった縁で光瑠とも親密であった。良成は四高時代に登山を始め日本山岳会にも入会し、明治42年には光瑠と共に民間人初の剣岳登頂を果たしたことがよく知られている。政財界で活躍した後年、世田谷の私邸に高山植物園を作ったり「日本花の会」を創設(昭和37年)したりしている。西涯は、河合良成の祖父と同じ町内の有力者同士でもあったことから、光瑠や松村勇を介して親交が深かった(松村壽氏のご教示)。
- (28) 谷村前掲書、18~19頁参照。かつて共に宮永菽園に学んだ松村精一郎(後に『新撰万国地誌階梯』などを著す)の影響があったとする。徳富蘇峰の『七十八日遊記』や新聞に載る朝鮮探訪記事や大谷探検隊の記事などを書き写していたことを紹介する。
- (29) 安政4年(1857)~昭和3年(1928)。日本の植物学者、民族学者、冒険家。当時ほとんど情報がなかった八重山諸島などの南西諸島で動植物の調査や旧慣調査を行い、植物学や民俗学の発展に貢献したが、その業績についてはほとんど知られていない。明治28年(1895)に台湾総督府民政局への赴任、大正13年(1924)まで総督府に勤めた。
- (30) 在任は明治37年11月~大正元年12月。在任中の明治38年5月15日、ロシアのバルチック艦隊が宮古島沖を通過している報を大本営に打電させたことで知られる。

図1 『大日本本草』の編纂過程推定モデル



凡例

- ・この図は、『大日本本草』がそれ以前に作られた植物に関する著作(類編書)を増補再編集したもの、と仮定し大まか編集の流れを示した推定モデルである。
- ・表中の「明治初年」とは、西涯の書簡にある記述から明治10年前後と推測されるが、具体的な時期は未詳。
- ・『日本農業植物誌』、『居家必用日本本草』編纂の順は未詳、表中の上下の位置とは無関係。
- ・表中の←→は、編纂した際にお互いに関連を持つ可能性を示すが、関係の深さを示すものではない。

表 1 残存する表紙の分類

大日本本草	
大日本本草木類編卷之壹	
大日本本草木類編第一続編	
大日本本草木類編卷之貳	
大日本本草木類編卷之三	
大日本本草木類編卷之三 禾本科竹類	
大日本本草木類編卷之四	
大日本本草第四卷 木類ノ部	
大日本本草木類編卷五	
大日本本草木類編卷六	
大日本本草木類編卷之七	
大日本本草木類編卷之七 単子葉之部	
大日本本草木類編卷之八	
大日本本草木類編卷之九	
大日本本草木類編卷之拾	
大日本本草木類編卷之拾壹	
大日本本草木類編卷之拾貳 合弁植物	
大日本本草類編卷之貳 木賊類 石松類 苔類	
大日本本草類卷之三 単子草之部二	
大日本本草類卷之四 単子葉之部	
大日本本草類編卷之八	
大日本本草類編卷之拾	
大日本本草類編卷之 単子葉之部	
大日本本草類編卷之 合弁花類	
大日本本草類篇卷之 合弁類花四	
大日本本草類編卷之 離弁花類	
大日本本草類編卷之 木賊類 石松類 苔類	
大日本本草類参考之部	
大日本本草類編 凶	
大日本本草海草類編	
大日本本草菌類編	
大正二年八月起草 虫類 有翅六脚 甲虫類 海陸産貝類	
大正二年八月起草／鳥類編	
魚類編 淡水産類／海魚類	
禾本科／莎草科 凶 ※2枚あり	

日本本草

日本々草木類編
日本本草凶 木類之篇第一
日本本草木類編 凶及説第二
日本本草類編三
日本本草類編卷之八 単子葉
日本本草類編卷之九 単子葉
日本本草第九 第拾 木類之部
日本本草木類第拾 第拾壹卷
日本本草類編卷之拾四／離弁花
日本本草類編卷之拾九 合弁花
日本本草類編卷之貳拾壹 合弁花類
日本本草苔鮮類 卷之貳拾五

表 2 収載品目の総数

全体項目件数	4,826	重複する品目の記載を整理し、「品類」として名称を列記したものや、名称のみを記入しているものも含む。
1 植物類	4,245	菌類を除く。海藻を含む。
2 菌類	82	きのこ全般
3 鳥類	166	
4 動物類	41	哺乳類、甲殻類、など
5 貝類	16	
6 魚類	150	
7 虫類	114	昆虫、両生類 他
8 飯・餅加工食品	10	「粳米」「糯米」「餅」「まんじゅう」「素麺」「粥」など
9 古銭・古物	2	「開元通宝」「筑紫都府楼瓦」の2点のみ

植物類	4,245	上記表の1
植物類以外	581	上記表の2～9

添付彩色画	941	画に名称の記載がないものを除く。一枚の用紙に複数の画が有るものは件数で加算。切り抜いた画を貼付したものも多く、件数と枚数は一致しない。
添付墨線画	60	画に名称の記載がないものを除く。一枚の用紙に複数の画が有るものは件数で加算した。また切り抜いた画を貼付したものも多く、件数と枚数は一致しない。

「応用」を記入するもの	1,018	
「雑記」を記入するもの	234	
培養など、その他を項立てして記入するもの	145	主に農作物の記が多い。



写真1 平積みの状態 (第一の山を搬出後)

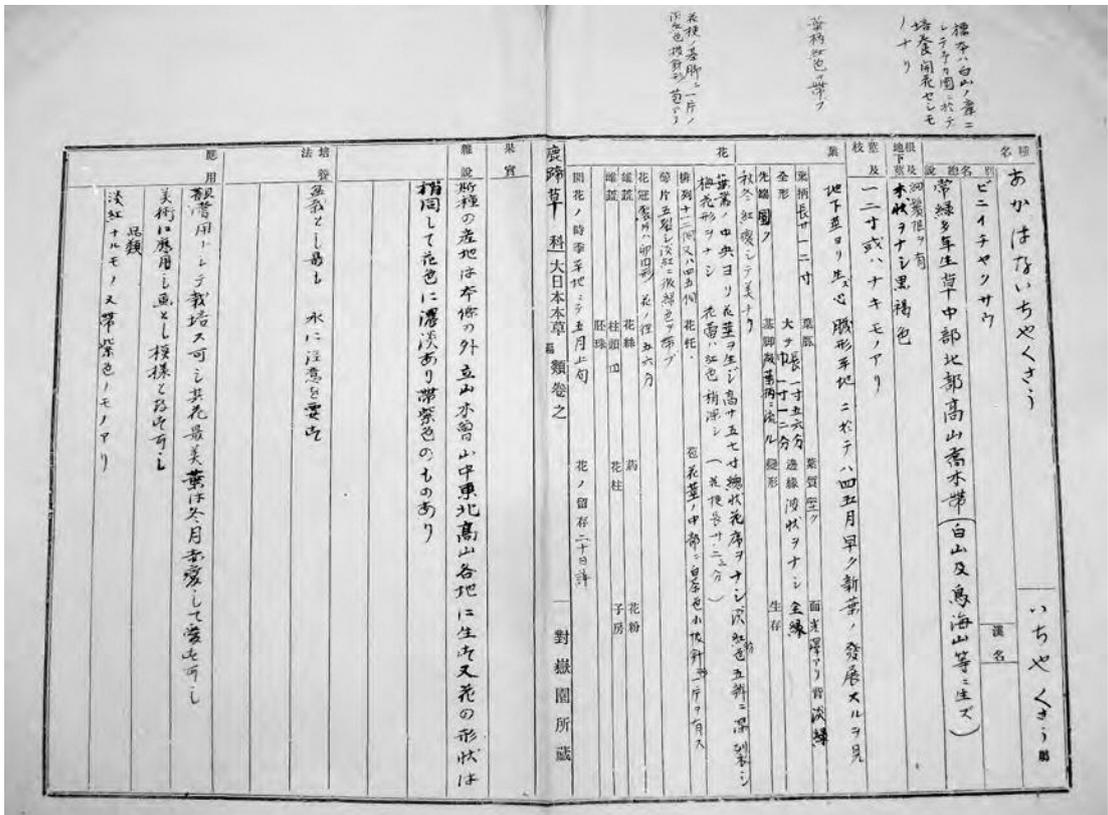


写真2 特注専用箋の記入例

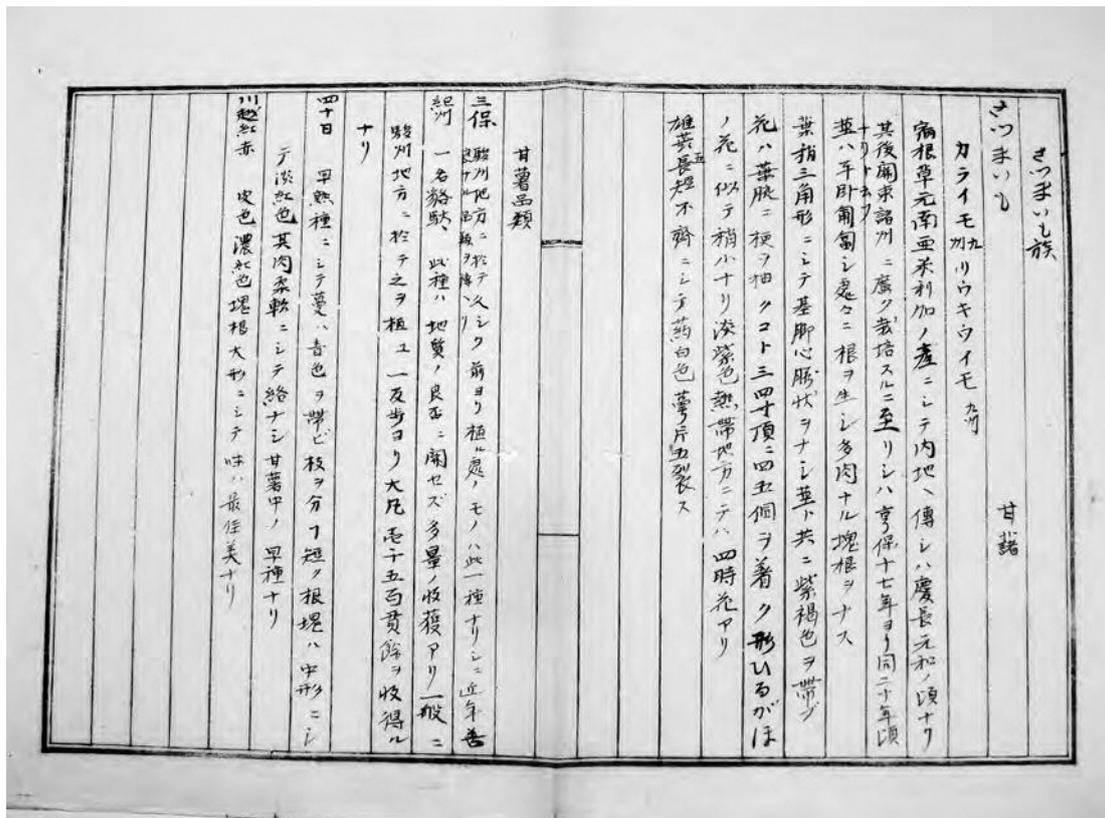


写真3 さつまいも①

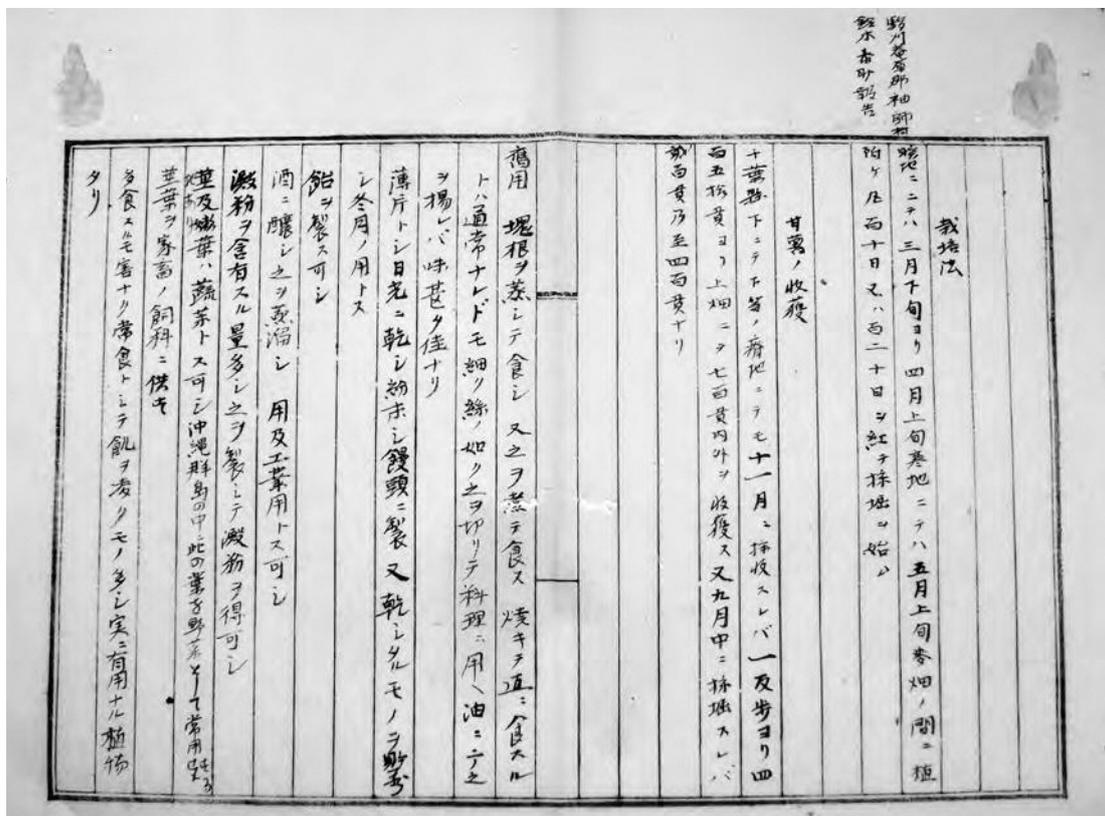


写真4 さつまいも②



写真5 彩色画「たてやまふうろう」

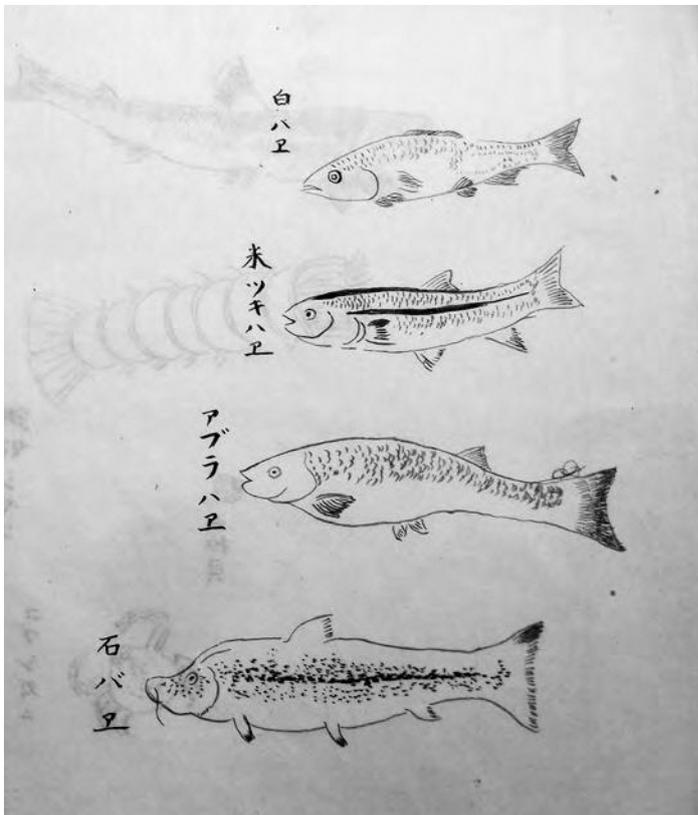


写真6 墨線画 魚類



写真7 落款①  
谷村/西涯



写真8 落款② 秋香亭